
流星のロックマンnext stage? ~FM**星の危機・過去の遺産**~

虎んセル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマンnext stage? ～FM星の危機・過去の遺産～

【Nコード】

N7862L

【作者名】

虎んセル

【あらすじ】

3度地球を救った伝説のヒーロー、ロックマン改め星河スバル平和(?)になった地球での彼の日常を描く。FM星に三度目の危機!?スバルの記憶が……!フォルテに立ち向かう……光熱斗は生きていた!

あれ？（前書き）

平和になった地球で、徐々に日常を取り戻しつつある星河スバルとウォーロック。そして彼の仲間たちとの関わりを描く。

あれ？

時は22XX年、地球では電波世界が発達していた。

・・・星河家・・・

「ウォーロック、ウォーロックってば！」

「ん、なんだスバル？」

「なんだじゃないよ、これ見て」

「ん・・・、Helpシグナルじゃねーか。なんで点滅してんだ」

「わからない。けれどこの近くにきつと助けを求めている人がいるんだよ」

すると、ウォーロックは5秒もたたないうちに

「おい、あれをみる」

スバルは自分の部屋の窓から、外を覗いた。

「人が川でおぼれてる・・・」

練習

「大丈夫ですか！今助けます！」

スバルは叫んだあと、川に飛び込んでいった。

・・・数分後・・・

「助けていただいてありがとうございました」

溺れていたのは男の人だ。スバルと年は近いように見える。

そしてなぜ川の中にいたのか、気になったスバルは尋ねた。

「あのー、どうして川に溺れていたのですか」

男は答えた。

「いやあ、実はドラマの出演がはじめて決まって、川に溺れる役だったから練習してたんだよ

それで川に入ってたんだ」

「へえ、ドラマかあ」

スバルは、役者って大変だなー、と思っていた。すると、

『おいおい、お話し中のところいいが、服びしょびしょだろー、カゼ引くぜ』

ウォーロックは珍しくまともなことを言った。

「そうだねウォロック、あ、そうだ、君も僕の家に来てよ。このままだらカゼ引くよ」

「ほんとうに・・ありがとう、そういえば君の名前は聞いてなかったね」

「ぼくは星河スバル、この近所に住んでるんだ。で、こいつはウォロック。ぼくのウィザードさ」

「ぼくは川中デキト。へー、ウォロックって言うんだ、かつこいいウィザード持ってるね」

『かつこいい！？はっはっは、わかるやつはちゃんとわかってるんだな』

「ごめん、こいつ調子乗りやすいから」

『え、なんか言っただかスバル』

「なんにもないよ」

ハハハ・・・

練習（後書き）

雑くてすみません。

「川中デキト」はオリジナルで、「デキト」は漢字で「溺人」、川の中で溺れていた人ということで「川中溺人」にしました。

ストーリー募集しています。よければコメントください。

まさかの・・・

ただいまー

スバルの声が家の中に響く

「おかえりスバル、ん？この人は友達？」

「うん、川中デキトって言うんだ。」

「先ほどはスバル君にお世話になりました。」

デキトは丁寧な口調で言った。

「あら」

あかね（スバルの母）は、あることにやっと気づいた。

「服びしょびしょよ。さきに着替えなさい」

そしてスバルは服を着替え、あかねが服を洗うから待っててね、ということデキトはスバルの服をかりて、二人はとりあえずスバルの部屋ですごしていた。

「スバル君は小学生？」

「うん、コダマ小学校の6年生だけど、なんでわかったの？」

「勘」

ハハハ

そしてデキトは話を続ける。

「僕も6年生なんだ」

「どの学校？」

「いや、通信教育なんだ、仕事が忙しくて・・・なかなか学校に行けなくて」

「・・・」

少しの間沈黙が続いた。デキトの顔は少しさびしそうだった。

「でも・・・」

デキトは再びしゃべり始めた。

「でも、目標があるから」

スバルが聞き返そうと口を開こうとすると

『何なんだ、お前の目標って』

ウォーロックが先に言った。

「・・・、響さんに追いついて、結婚することだよ。」

スバルは驚いた。しかし、そんなスバルに臆することなくウォーロックは

『響って、誰だ』

「響ミソラだよ、あの有名な」

「・・・」

スバルは驚きすぎて言葉も出ない。

「スバル君どうしたの？」

デキトは言った。

しかし、スバルは言葉が見つからない。するとまたウォーロックが言った。

『ああ、響ミソラはこいつのブラザーだぜ』

「えっ、ブラザーだったの!？」

デキトはさすがにびっくりした。

「ご、ごめん。こんな話してしまって」

ーピンポーンー

誰かが来た

まさかの・・・（後書き）

すみません。完成度が低いです。

とにかくこれからも書いていくんでよろしくお願いします。

訪問者

「スバル、今洗濯物取り入れてて手が離せないから代わりに出
て」

あかねがほえる。大吾（スバルの父さん）は今WAXAで仕事
で家にいない。

『スバル、とりあえず行こうぜ。わりーがデキト、ちょっと待っ
ててくれ』

そう言つとスバルをハンターV Gの中から引っ張り、強引に連れ
出した。

ガチャッ

・・・

「久しぶりだな、スバル、そしてウォーロック」

「・・・、あつ、暁さん。どうしたんですか」

「これから、遊撃隊の・・・解散式を行う」

「えっ？」

「なーに、理由はWAXAで説明するさ、これから来てもらえるかな」

「はい・・・」

「じゃあ今から2時間後だ、それまでにきておけよ」

『ウォーロック、お前も遅れるなよ』

『けっ、お前こそ遅れて、暁のせいにすんなよ』

『・・・いきましよう、シドウ』

『おまえゝっ、無視すんなあアシッド』

暁&アシッドは帰り、スバルは部屋に戻った。

そのころにはすでにデキトの服は洗えており・・・

「洗っていただきありがとうございます」

「また来てね」

あかねがいった。

「はい、じゃあスバル君また」

「うん、じゃあまたね」

ギョッ、バタッ！

「スバル・・・」

あかねはしゃべりだした

訪問者（後書き）

今一気に書き上げているので、また意見のほうよろしく願います。

提案

「なに、母さん」

「どうしたの？」

「・・・」

「ごめん、さっきの話全部聞こえてた」

「・・・ピンポーンー」

『おいスバル、この感じは間違いねえ、ハープの野郎だ』

「半年ぐらい会ってなかったもんね」（あかね）

「・・・」

「でもね」

あかねは続ける

「わたしも大吾さんが事故にあつたときショックだった。

でもね、ずっと信じてた、たとえ連絡取れなくても生きている
って、いつまでも好きだって。

スバルもミソラちゃんをずっと応援して、・・・好きだったんで
しょ。

デキト君もミソラちゃんのことすきらしいけど、スバルはデキ
ト君以上にミソラちゃんのこと

想ってたって、信じなさい。あなたとミソラちゃんはブラザー
なのよ。

・・・今日いまから、ミソラちゃんに会うか、会わないか、ど
うする？

スバルに協力するわ？」

-
-
- 玄関の外――――

「じゃあ・・・」

「スバル君どうしたのかな？」

『・・・フッフ』

「なに笑ってるのハープ？」

「ーガチャッー」

「お母さん（スバルのお母さんのこと）」

「ミソラちゃん、久しぶりね」

「お久しぶりです、あのースバルくんは居ませんか」

「スバルなら・・・、今カゼで寝てるわ」

「えっ、そうなんですか、じゃあ、」

「スバルの看病なら大丈夫よ」

「えっ」

「NAXAでなにかあるんでしょ」

「は、はい。」

「じゃあスバルの分まで頑張ってきて」

「は、はい」

「また来てね」

「は、はい、では失礼します」

「ごめんね」

「――ガチャッ――」

「今日のスバルママ、いつもと違うような」

『フフフッ』

「ハープ、さっきからなに笑っているの」

『教えてほしい?』

「う、うん」

『実はね、……』

「……、ハープっ!」

『なーにミソラ』

「電波変換よっ!――!」

『はーい』

「電波変換、響ミソラ、オン・エア！」

「行くよ！」

提案（後書き）

設定がごちゃごちゃしてすみません。
意見など、よろしくお願いします。

ただいま電波変換中

『おいスバル、いつものお前らしくねーじゃねーか』

「・・・」

『さっきの男の言ったことか？ハハハ、気にすんな』

「・・・うん」

『かわんねえなあ・・・。。はあゝ、もう勝手にしやがれ』

ウォーロックはウィザードOFFした。

・・・そのころ・・・

「ここがスバル君の部屋ね」

『んでこれからどうするの？』

「さあ、知らない」

『そう・・・』

「そこまでかんがえてなかったんだ・・・」

スバルが切り出した。

「ミソラちゃんのこと・・・、そこまで考えてなかったんだ。

ただ・・・ミソラちゃんとは・・・なんとなく付き合いをして
ただだけで・・・

デント君みたいに、そんな目標とか、結婚したいとか、そのた
めにがんばるんだって

言っている人がいるのに。なんか僕、デントくんに失礼じゃな
いかな。」

『・・・そういうもんなのか』

「・・・」

『はっ、とりあえずWAXAにいこうぜ。なんかあんだろ』

「そうだね・・・」

・
・
・

「ハープ、デント君って誰だったっけ」

『ミソラ、台本ぐらい目を通しておきなさいよ。明日のドラマの共演者でしょ?』

「あっ、あの人か」

『で、今日はどうするの』

「・・・、とりあえず行くよ」

ただいま電波変換中（後書き）

あいかわらず、字数が少ないです。

もうあと2話位で終わる予定なんで

あくまでも予定です。

ウォーロックがちょっと性格違うかもしれないけれど

『なんか言ったか』

いえ、何も。

再会

「え、これより解散式を行います。では、まず長官からのあいさつです」

「本日はお集まりいただき有難うございます。

約一年前、メテオGから地球を守るというレゾンのもと、暁くんをはじめとする遊撃隊が結成され

見事彼らのおかげで地球の危機を脱することができました。

そして事件解決から半年が過ぎ、暁くんが戻ってこれたことで、レゾンは達成され

平和が訪れた今、もはや遊撃隊の出番はなくなつたため、ここで解散式を行う所存でございます。

遊撃隊の皆さん、そしてメテオGの解決に当たった皆さん方、
ここで任務終了とします。

いままでお疲れ様でした。」

・・・パチパチパチ・・・

「では次に隊長からの挨拶です」

（え？俺のこと？）

（そうですよ、シドウ）

（あいさつなんて考えてなかったよ）、助けてくれよアシッド）

「暁君、はやく出て来なさい」

「はい」

長官に呼ばれ、しぶしぶ行くシドウであつた。

『こんな退屈なところめんだぜ』

『あら、ウォーロック、久しぶりね。』

『ゲッ、ハープじゃねえか。なんでここにいるんだ』

『ミソラの付き添いよ。そういえば、スバル君元気なさそうだね』

『俺は何にもしてねーよ』

『あら、そうなの。』

『ふん、知るかよハーブ。それよりお前こそなんなんだよ、かつてに部屋にはいつてきやがって』

『あら、そういつとこだけは敏感なのね』

『はあ、何のこつてんだ』

『ちあね』

「・・・」

『なあスバル、どうか面白そうなところに行こうぜ』

「・・・」

『そういやあ今日部屋に、ミノ・・・』

「スバルくんっ!」

誰かが声をかけた。もちろんスバルにとって、聞き覚えのある声だ。

「ミソラちゃん」

「半年ぶりだっけ、元気にしてた？」

「・・・、うん」

『あ、そうこいつが・・・』

『さうて、邪魔者はどこかにいきましょつか』

――がしっ――

『おいハープ、はなせ、はなせてオ~~~~~~~~』
イ』

ウォーロックとハープがどこかへ行ってしまった・・・

「スバルくん、来てほしいところがあるんだ。一緒にいこう」

「いいよ・・・」

そうして二人は歩き出した

再会（後書き）

とにかくいまは勢いで書いているので、読んでいただいている方にはもしかするとわからないところもあるかとはおもうんで、また意見などよろしく願います。

あと一つ前のあとがき、鍵括弧が改行できてませんでしたが一応ウオーロックの言葉なので。

交代（前書き）

いままで1つのページで量が少なかったなので、ちょっとだけ増やします。

交代

～前回までのあらすじ～

遊撃隊の解散式が終わり帰ろうとしたスバルは、6ヶ月ぶりにミソラと再会する。

あらすじー終ー

「映画の撮影、どうだった？」

スバルはミソラに質問する。

「けっこう楽しかったよ。まー、はじめは周りの人がほとんど知らない人たちだったけど」

「そうなんだ・・・」

・・・

そして二人がついたのは、・・・

「やっぱりこの景色が一番好きだなー」

「ミソラちゃんが行きたかったのは、ここ？」

「うん。だって、ここがはじめてスバル君とであったトコだから」

着いたのは展望台。スバルが毎晩いく場所だ。

もうすでに夜7時を回っていて、そらには無数の星が輝く。

・・・そのときだった

スバル〜

誰かの呼ぶ声が聞こえた。その声の主は

「ウォーロック？」

スバルが声をかける

『探したぜスバル』

「ハープは？」

ミソラが尋ねる

『いるはずだろ、この辺に感じるぜ』

いじゅー

ハーブはハンターV Gの中にいた、しかし・・・

「えっ、なんでスバル君のところにいるの」

『実はな・・・』

『ちょっと待って、ウォーロック。私がしゃべるわ。実はね・・・』

•
•

~~~~ついで1時間まえの出来事~~~~

『最近ずっと暇なんだよ あ~~~~~平和なんてつまんねえ!!!!』（ウォーロック）

『あら、いいじゃない、平和っていいわよ』（ハープ）

『なんでお前はそんな落ち着いてられるんだよ』

『毎日が楽しいからよ、ミソラの台本の相手したり、一緒に買い物したり、充実してるからね。』

でも、たまには休みほしいわ』

『フン、いいじゃないか。スバルは勉強ばかりしやがるし、なん

せ外にでもずっと空ばっか眺めてやがるから何も変化がねえ』

『まったく逆の生活だわね』

（もし私たちが入れ替わったら・・・、おもしろそうね）

『ウォーロック』

『なんだ』

『明日一日、入れ替わらない？』

『は？』

『だから、明日一日あなたはミソラのウィザード、私はスバルのウィザードで過ごさないかってことよ！……！』



『はっはっはっ、なんかおもしろそうだな、いいぜ、その計画の  
った!!』

『じゃあ、二人を探しに行きましょう』

『一暴れしてやるぜ!!!!』

~~~~~終~~~~~

『...の、ミッド。』

「ん、いいよ、スバル君は、どう？」

「いいよ、最近ウォーロックがうるさくてうるさくて」

『なんか言っ たかスバル』

『スバル君よかったわね、ウォーロックがバカで』

『くそ、ハープ、……………って無視すんな』

『じゃあ行きましよ、スバル君』

「ミソラちゃん、一日だけ我慢してね」

「だいじょうぶだよ。スバル君もハープと仲良くね」

『……おい、俺のことは無視かよ』

「ロックくん、よろしくね」

『いいぜ、その忙しいとやらを体験してやらあ』

そして二人は帰っていった。

ミソラとウォーロック

～～～前回までのあらすじ～～～

スバルとミソラのウィザードが入れ替わった。

～～～終～～～

「ただいま」

しかし返事は返ってこない

『誰もいねえのに何であいさつするんだ』

「なんとなく」

ウォーロックの質問に、ミソラが即答する。

「わたし、ふる入ってくるね、ウォーロックはこの部屋で待ってて。じゃ」

ガチャッ・・・

《意外ときれいだな・・・》

ウォーロックはそう思って、部屋を物色し始めた。

《ん、なんだこれは》

~~~~30分後~~~~

「ウォーロックお待たせ」

『おい、風呂だけで長すぎだろ』

「女の子のおフロは長いのよ」

『んで、なんだこれは、結構面白かったけど』

~~~~

月×日

今日はスバルと2回目のデート。
けっこう緊張したなあ。

場所はロッポンドーヒルズ。

まずはフジヤマパフェ(?)を食べた。

けっこうおいしかったけど、まだ2つぐらいは食べれたとおもう。
う。

そのあともいろいろやって、さいごにTKタワーの展示会にい

った。

ムーのことについてガイドさんから話を聞いていたスバルは、
なんかかつこよかった。

でもそのあとじゃまが入ってデートどころじゃなかったけど・

・

帰りにスバルはブラザーを結んでくれた。

またこれから一緒にだね。

〃
〃

〃
〃
〃

「ちよつと、な、なに勝手に見てんのよオ」

ミソラは顔を赤くしながら言った

『もしかして、お前』

「・・・」

ミソラの顔がさらに赤くなっていく

『・・・パフェ、もっと食いたかったんだな』

(・・・バカでよかった)

「さーて、ウォーロック、今から手伝ってもらっわよ」

そういつて、本らしきものを一式出してきた。

『なんなんだ、これ』

「台本よ、明日のドラマの撮影までに覚えなさいといけないの」

『なんで俺が手伝うんだ、覚えるのはお前だろ』

「読み合わせよ、ドラマのシーンを想定してセリフを言い合うのよ。さっ、早くやろっ」

『何でやらないといけねえんだよ』

サッ・・・

~~~~~

ミソラへ

ウォーロックは何でもやるっていつてたわ  
多少無茶させても大丈夫だからどんどんこき使いなさい  
じゃ、明日の撮影がんばるのよ  
スバル君が、会ったのしみにしてるって  
じゃあね。おやすみなさい。

ハープ

~~~~~

『けっ、ハーブの野郎の命令か』

なぜかウォーロックはハーブに弱く

《俺は女がニガテなんだよ》

「ウォーロック、なんか言った？」

『なんもねえよ、で、俺は何をすりゃあいいんだ』

「ここの役やって」

『
.....
読めねえ』

「えっ!?!」

『あー、でもこいつなら知ってるぜ』

「え、どこ……川中……、これなんて読むの」

『デキト、らしいぜ。おまえも読めてねえじゃねえか』

「もおーっ、いつもならハーブが教えてくれるのよ!?!」

『けっきょく読めてねえじゃねえか、はっはっはっ』

「もういい、わたし一人でやるから、ウォーロックはどっかいって」

そして、ウォーロックは外に追い出された。

《これじゃあスバルんとこと、一緒じゃねえか》

そう思いながら、しぶしぶリビングのソファで床につくのであった。

ミソラとウォーロック（後書き）

ルナ「もうすぐ10話目めなのに、なんでいまだに私が出てこないのよ……！」

キザマロ「まあ、おちついてください、委員長」

ゴン太「もうすぐでられるから」

ルナ「おだまりっ、二人とも。このまま終わったら、ただのスバル君とミソラちゃんの恋物語じゃない。しかもこの話の紹介には、スバルとスバルの仲間との日常を描く、ってかいてあるのよ。私たちの出番がないっておかしいじゃ……」

……強制終了……

出番があるので待っててください。

FM王（前書き）

10話目に入りちょっとしたサイドストーリーを書きました。
閲覧よろしくお願ひします。

FM王

この物語はディーラーが滅びてから半年後のこと。

「ケフェウス様、シリウスを倒しこの星の危機を救ったウォーリックならどうかと」

「確かに彼のおかげでこのホシは救われた、しかし……」

「しかし……?」

「人気と強さがあっても、彼自身にホシを治める能力があるとは限らない。」

「……」

「エンペルよ。」

「はい」

「彼は、このホシの政治学の最高峰、F M 政治大学校を卒業したことは知っているな。」

「はい」

「なぜ彼が、政治学を志したか知っておるか。」

「・・・いえ」

「彼はこのホシの政治に参加し、いずれ私に近づき・・・殺そうとしていた。それはなぜなのか」

「・・・」

「彼は故郷のA M 星を滅ぼされた、・・・私によって」

「・・・」

「それを恨んだウォーロックは私の首を狙った。
そしてあるとき、われわれと友好関係を結ぼうとする宇宙人がいた。」

・
・
・
・

「それが星河大吾率いる地球人だ。」

・
・
・
・

「しかし、あこのころの私たちは誰も信じる事ができなかった」

・
・
・
・

「そして、私はウォーロックに偵察・抹殺命令を出した」

・
・
・
・

「そのときだった、ウォーロックは去ろうとしたその瞬間、私からアンドロメダの鍵を奪い、

・・・地球人の宇宙船へ逃亡した」

・
・
・
・

「そして、彼は・・・星河大吾らと出会い・・・地球人を助け、自身も逃亡した。」

「われらは使者を送ったが、次々とやられてしまいアンドロメダをも倒されてしまった。

星河大吾の息子、星河スバルとウォーロックに」

「エンペルよ」

「はい」

「私がこのホシを去ってしまい、このホシに危機がおとずれたとき、このホシを救えるのは

・・・ウォ・・・」

・ ・ ・ バタン ・ ・ ・ ・ ・ バンバン ! ・ ・ ・ ・ ・

「 ケフェウスよ、私の故郷も貴様によつて滅ぼされた ・ ・ ・ 」

「 クツ、わ、悪かった、しかし、き、君の故郷を襲わせたのは私

ではない・・・」

「俺がそんなこと知るかよ、お前じゃなくても襲ったのはFM星人だ。」

王であるお前の責任なんだよ」

・・・・・・

「じゃあな。ケフェウス。」

「クソ！」

「ケフェウス様、今地球からの・・・！？」

「フッ、見られてしまったか・・・。まあいい。順番は狂うが、まずはこのホシの希望とやらを消しに行くか」

「おまえには・・・たお・・・せ・ん」

バ
タ
ッ
！

「ケフェウス様、気をお確かに」

「あばよ！」

・・・エンペルは消えていった。

「ケフェウスさま――――」

スバルとハーブ

「お帰りなさい、スバル」

「ただいま、母さん」

「もうご飯できてるわよ。先に食べなさい」

・・・10分後・・・

「母さん、フロ入ってくるよ」

・・・10分後・・・

『やっぱり部屋きれいなね』

帰ってきてやっと出たハープの言葉

『それにしても、あなたのお母さん、どうして私に気がつかなかったの？』

「いつもあんな感じだよ。基本はウォーロックからしゃべるからね。」

今日のウォーロックおかしいな、とか思ってるんじゃないかな」

『ふん、そうなんだ』

・・・ガサゴソ、ガサゴソ・・・

『何してるの?』

「勉強だよ。明日は学校だし……ちゃんと予習しておかなきゃ」

『へえ～～～～、がんばってねえ』

・・・1時間後・・・

『ねえスバルくん、なんかすることない、暇なのよオ』

・・・

スバルは集中しはじめると、なかなか集中の糸が切れない・・・

・・・さらに1時間後・・・

『ね〜〜え〜〜、スバルく〜〜〜〜ん、な〜〜かな
い〜〜の〜〜オ』

・
・
・
・
・

・
・
・さらに1時間後・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

スバルはまだ集中している・
・
・

『・・・フッフ、これならどうかしら・・・』

・・・カチッ

と・び・か・う・シグナル

それぞれのきょうをの〜せ〜て〜

「わあ」

カチッ・・・

「だめだよハーブ」

『だつて~~~~~暇なのよ~~~~~』

「そんなこといわねても・・・」

『じゃあ、なんでミソラのCDがこんなところにあるのかしらね』

「そ、それは……」

返事に困惑するスバル。

『考えすぎよ。……でも会わない間でもミソラのこと
応援してくれていたのね』

「・・・」

『もしかして・・・照れてる？』

「照れてないよ」

『アラそう。・・・でもね、スバルくん？』

「・・・」

『自分の思いを言っちゃって、大切なことよ。そうね・・・今日の昼のこととか』

・・・

『ウォーロックにいろいろ教えてもらったのよ、まあ、ウォーロック自身は何いつてるのかわかってなかったけど』

．．．．．

もう、スバルはハーブに負けていた。

『デキト君．．．だったけ？あの子のこと、けっこう気にしてるんだよ』

気にするのは、別にいいけど．．．、後悔だけはナシよ。』

ハープは続ける

『女の子はね、押しに弱いだよ』

いまはスバルくんのが気になってるからいいけど・・・

もしデキトくんが、ミソラを押しまくって、ミソラがデキト君を好きになってしまったら

．．．スバルくんには、もう、二度と振り向いてくれないかも
しれないんだよ』

「・・・・・・・・・・」

『デキト君はデキト君、スバルくんはスバルくん

もし、スバルくんが、ミソラのことを想って一緒にいたいと
思ふのなら

ちゃんと、ミソラに言葉で伝えなさい。』

「
・
・
・
・
・
」

『じゃあ、ワタシ、もうそろそろ休むから。じゃあね
』

「
・
・
・
・
・
・
ハ
ー
プ
」

『
な
に
？
』

『・・・・・・・・・・フフッ、それでいいのよ』

「・・・・・・・・・・めづるがとっ・・・・・・・・」

スバルとハーブ（後書き）

若干？ほとんど、話のつじつまがあってるかな？

とにかく書き続けて、文章力鍛えていくんで、よろしく願います。

日常生活？（ミシラ&ウォーロック）

「ウォーロック〜、起きて〜、仕事よ仕事〜」

『・・・ん・・・まだ朝の4時じゃねえか。』

「今日の撮影は移動の時間がかかるのよ、さっ、起きて」

『・・・』

「・・・もういいよ。さきにいくからね」

『おまえがウィザードOFFすりゃあ、いいじゃねえか・・・』

「だ〜か〜ら〜、このハンターV Gはハーブにしか反応しないの!!!」

だからウォーロックがうごかないと・・・」

『カーツめんどくせえ。わかった、わかった。はいりゃあいいんだろ、はいりゃ。・ほらよ』

・・・シュツ・・・

「あーーーーーっ、朝からイライラするーーーーっ」

『ZZZ・・・』

ウォーロックは、そんなミソラを尻目に、再び寝始めた。

「・・・えっ、もうこんな時間！？　はやくいかないと！！」

・とにかく準備していたバッグを担ぎ、急いで出て行こうとしたが・

「いつてきまゝす」

たとえ急いでも、これだけは忘れないミソラであった。

~~~~~数分後~~~~~

「ハアハア・・・、やっとついたよ。」

しかし、ミノラは肝心なことに気がつく。

「あれっ、ウェーブライナーって・・・いつ出るんだっけ？」

しかし、いまミソラ以外にいるのは、ウィザードのウォーロックだけだ。

「ウォーロック起きて、起きてってばあ」

・・・ZZZ・・・

「もう、役に立たないなあ。・・・仕方ないけど、こうなったら・・・」

~~~~ピッ、ピッ、ピッ、プルッ、プルッ……ガチャッ

『ん、なに、どうしたの?』

「どうしたの、じゃないわよ。ウェーブライナーの時間調べてちょうだい」

『朝からどうしたの、ミソラしくないわよ?』

「ウォーロックが寝たまんなのよ、ほんとと起きないんだから。で、時間は?」

『……よ。まあ、落ち着いて。』

「……うん、わかった。で、そっちはそうなの？」

『言われなくてもちゃんとして、スバル君に仕込んでおいたから』

「え……なんか言ったの」

『ふふふ、まあ今日の楽しみにして。じゃあね』

「ちょ、ちょっとハープ、どういうこと、ねえ、ねえってば」

ツー、ツー、ツー……

「きれちゃった」

~~~~~4時間後~~~~~

「はあゝ、やっぱりサイコ」

『ZZZ・・・んゝ、あれ、ここはどこだ』

「シーサーアイランドよ。修学旅行で来てたじゃない。」



「ああ、たしか来たような」

ミソラちゃん〜ん

「浦方さん!!!」

「久しぶりだねって、そうでもないか」

「なんでここにいますか？」

「ああ、チームミソラとして、ミソラの初の映画出演をサポートしないわけにはいかないだろ！」

「そうなんですか？またよろしくお願いします。」

「ところで・・・ハープはどうしたんだ？いつもなら挨拶で姿みせるのに」

『・・・あ？』

「えええっ、なんでウォーロック？」

『なんだ、浦方じゃねえか』

「ウォーロック、あいさつしてよ！」

『ふん、めんどくせえ……散歩してくるわ』

「ちょっと〜」

ウォーロックは勝手にウィザードONし、どこかへ行った。

「も〜ウォーロックったら！ 浦方さんも手伝ってくださいよ」

「ははは、ごめんごめん。でさ、なんでハーブがウォーロックになってるの？」

「それは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんですよ」

「そうだったのか。」

い  
響さん、浦方さん、打ち合わせやるんでこっちきてくださ

~~~~~そして・・・

・・・ということなのですが、少し変更がありました、

「変更って、なんなんですか」

浦方が尋ねと、監督が

「実はだな・・・溺れ役担当の川中君が出演を拒否したんだ。

」

「なぜなんですか」

「昨日電話が来て・・・」

・
・
・
そのときだっ
た

ミ
ソ
ラ
！
！
！
！
！

「ウォーロック！？どうしたの、そんなあわてて」

『こんなトコで油売ってる場合じゃねえぞ、とにかく急げ』

「なんでいきなり・・・」

『説明はあとだ。はやく行くぞ』

・・・プルッ、プルッ

ミソラのハンターVGだ。

「どうしたの、ハー・・・」

『ミソラ！大変なの！スバル君が、スバル君が……』

プツン………

「ミソラちゃん、早く行って来い。」

ウォーロックが言ってるんだ、ハープにも何かあったはずだ。
責任はおれがとるから、早く………行け……！」

浦方が促す

「ありがとう、浦方さん……」

ウォーロック……行くよ!……!」

『よし、コダマタウンへ、急ぐぞ』

日常生活？（スバル＆ハーブ）

「…………ふあ…………ん？…………え」
「…………つ」

…………スバル…………、チコクするわ…………

下から母の呼ぶ声が聞こえる。

時間はすでに8時を回っていた。

スバルに残された時間は、あと15分

「・・・あれ、ハープは？」

・・・はやくしなさい

「はい」

いつもだとウォーロックがしつこく起こしてくれるが、今日はいいい・・・

~~~~~10分後~~~~~

「いつてきまゝす」

スバルは最低限の準備をした。

もちろん朝食を食べる暇はなく・・・

グ~~~~~~~~ッゴゴゴ~~~~~~~~ッ

「腹減ったあ」

~~~~~キンコーンカーンコーン~~~~~

「ま、間に合ったあゝゝゝ」

ガラガラゝゝゝゝ

「スバル、おせえぞ！」

「ふふふゝつ、ぼくの計算によると100%寝坊ですね」

ゴン太、キザマロのツツコミが飛ぶ。
だがまだスバルにとっては、ましなほうであった。

「星河くん？あなたの寝坊グセ、委員長としては許せないわね」

口調は落ち着いているが、底知れぬ恐ろしさがあった。

「そうだね、冬休みにあなたのために、合宿に行きましょう。」

「いいんちよう、行くつてどこにだよ」

ゴン太が聞く。

「それは、今から考えるのよ。ちようどいいわ、あと三ヶ月で卒業だし。」

「思い出作りに最適ね。」

全員席に着け

キンコーンカーンコーン

~~~~~1時間目終了後~~~~~

「スバル、次体育だぜ！早くいこうぜ」

「ゴン太。・・・先行つといて」

「わかったぜ。早く来いよ」

そして、スバルは歩き出した。

（ハーブはどこにいったのかな・・・）

・・・スバル君、逃げて！！！！

「え、どこにいるの？ハーブ！」

『星河スバル・・・おまえだな・・・』

「き、きみは、だれ」

『ふふふ、我が名はエンペル、次期FM星の王だ』

「エ、FM星の………王？ケフェウスは……」

『……おっと、おまえはこれ以上知る必要はない  
……人質のおまえにな！！！！』

・・・ミソラ、大変なの、スバルくんが、スバルくんが・・・

ウッ・・・

『まだ意識があつたとはな、とりあえず・・・一つ取引をしないか？』

「・・・なにをするつもりだ・・・」

『なぐに、簡単なことさ。』

俺はだれとでも電波変換できるんだよ。  
そこでだ。おまえに選択権をやる。』

「  
.  
.  
.  
.  
」

『お前が人質になるか、ハーブが消されるか、だ』



「・・・・・・・・！？なんで」

『スバル君、わ、わたしはいいか・らはや・・・・・・・・く』

ガンッ！！！！  
バタッ・・・・・・・・

『・・・・・・・・』

『まだ意識があつたか・・・・・・・・さあ、早く選べ。今度はこの場所を消すぞ！！！！』

「ハープ………!」

（ハープがいなくなれば、ミソラちゃんが悲しむ……  
もう、そんなミソラちゃんは……もう……  
見たくない）

「・・・わかった。ぼくが・・・人質になる・・・ただ」

『なんだ？』

「誰も、キズつけないでほしい」

『わかつた』

《んなこと守れるか》

シュッ・・・

「ウッ……うあああああああああああああああああ」

『フッフッフ、なかなか居心地がいいな……さて、ウォー  
ロックを探すか……』

・  
・  
・  
・  
パッ  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

日常生活？（スバル&ハーブ）（後書き）

若干編集し直しました。文字を打つのが遅くてすぐにタイムアウトしてしまうので。

隊長

WAXA日本支部

「大変です、長官」

「どうした」

「コダマタウン上空に強い電波反応が！

．．．しかしまだ原因がつかめておりません」

「はやく調べてくれ！それから、暁をコダマタウンにむかわせろ」

「それが．．．．．もう向かってるんです」

「．．．．．はっはっはっ、暁くんらしいな、って笑ってる場合じゃない。」

調査を続けよう」

コダマタウン学校

「スバルくん、どこですか」

ニガテな体育を今日も見学するキザマロが、委員長長の命令で探しに来た。





「いや、その必要はない」

・・・あ、あなたは・・・

ぐくぐくぐくぐく・・・

『シドウ、あなたが食べているからこんなことになってしまったのですよ』

「まあ、そういうなよアシッド。」

「むむ、このひとはもしかして・・・伝説の遊撃隊隊長、暁シドウさんではないですか」

キザマロの辞書に載ってないものはない

「ははは、そう、この私が、メテオG衝突を阻止した、その名も・・・」

『シドウ、本部から連絡よ』

ピッ．．

「シドウ君、原因がわかったか」

「はい、おそらく．．．この電波は地球のウィザードのものではないと思われます」

「わかった。事件の可能性があるからコダマタウンの住人を全員避難させる」

そして、現場の電波物質を集めて転送してくれ」

「わかりました。あと．．．スバルくんのハンターV Gが．．．」

「スバル君の身に何かあったのか？」

「．．．ハープが現場付近に倒れておりました。おそらく、なにか知っているだろうと思われます。」

「わかった。では、ハープも頼む。では、あとは任せたぞ」



隊長（後書き）

すみません。

セッションのタイムオーバーがこわいので、文章を短くしました。

PM星

ウェーブライナーの車内〓〓

「ウォーロック、いったい何が起こったの？」

『感じたことのない電波を感じた、おそらくこの電波は……』

ピンポンパンポ〓ンーー

ご購入いただきありがとうございます。

次の停車駅はコダマタウンですが、現在避難勧告中のため、WAXAニホン支部に臨時停車いたします。  
もう一度繰り返します〓〓〓

「ウォーロック、どうしたらいい？」

『……待て、何かが来る』

バリ、バリバリバリ・・・ん？

「ひさしぶり、ミソラちゃんじゃないか」

「シドウさん、いったい何が起ったんですか？」

「ハナシはWAXAでしょう、今は人手が必要なんだ。・・・それから・・・これを」

「・・・ハープ、ボロボロじゃない！何があつたの！？」

『おい、ミソラ・・・そのハンターVG・・・』

「ウォーロック・・・あつ、じ、これ、・・・スバルくんの・・・」

『おい、アシッド、スバルはどこなんだ』

『・・・現在調査中だ・・・』

そのとき・・・

『ミ、ミソラ・・・』

「ハープ！ねえ、いつた何があったのよ。スバルくんはいつた  
い・・・」

『ス、スバルくんは・・・エンペルとかいうやつと・・・電波  
変換して

・・・どこかにいってしまったわ・・・』



「・・・・・・・・！？」

『やっぱりあいつか』

「ウォーロック、なんかしってるの！？」

『ああ、やつは俺とおなじ・・・FM星に故郷を滅ぼされた  
その星の名は・・・・・・・・PM星』

「・・・、ウォーロック、そのハナシ詳しくきかせてくれないか・

」

シドウが言った。

『ああ。PM星人はな、昔、AM星、FM星以上に発達していた。  
俺たち電波体系の惑星で最強のホシだった。

FM星はそのころから、ケフェウスが支配していた。

そのころの電波体系のホシは平和だったんだ。

しかし、あるとき・・・・・・・・

**P M 星（後書き）**

まだ続きます。

タイムアウトの関係上。

## 裏切り

『FM星は、ケフェウスが支配していた。

そのころの奴は、まだ他人を信用することができていたんだ。

だが、ある奴が、ケフェウスの知らないところである兵器を作っていた。

その兵器こそアンドロメダ。

しかし、アンドロメダはどう見てもFM星の技術で作られた物ではなかった。

そう、アンドロメダはPM星の当時最先端の技術でつくられたものだったんだ。

しかし、その事実を知らないケフェウスに、ある事実が舞い込んできた。

PM星、FM星の謀略によって滅亡……

その事実を知ったケフェウスは、犯人を捜した。

しかし、その犯人は……当時、王の右腕だったランバルだった

ケフェウスはもつとも信頼していたランバルに裏切られ、処刑し、

以後、誰も信用しなくなった。

そして、A M星がF M星を制裁しようという噂を知ったケフェウスは、

アンドロメダを使い、A M星を含む電波体系の惑星を、滅ぼした……。

おそらく、故郷を奪われた怒り、憎しみで、エンペルは何かたくらんでるんじゃないかねえか？

まあ、なんでスバルに電波変換したのかは、謎だな。  
☞

ウェーブライナーは、NAXAニホン支部に到着した。

## 帰ってきた男

「シドウちゃん、まってたわよ。さっ、長官、会議、始めましょ  
う」

「では、会議を始める。まず、ヨイリー博士から、よろしく願  
いします」

「空気中の電波物質だけど、このホシそしてFM星人のものでは  
なかったわ。

あと、スバル君だけど、このことに関しては、ハープちゃん、  
ヨロシクね」

『はい、それは9時ごろ………』

ハーブは知っている全てのことを話した。  
エンペルは、ウォーロックを探していたこと  
だれとでも電波変換できること

そして、スバルがハーブを守るために自らを差し出したこと・

・

「ハーブちゃん、ありがとね。」

あと、困ったことに、これだけしか情報がないのよ」

「ヨイリー博士！」

「なに？シドウちゃん」

「ウォーロックがエンペルについて、何か知っているようですよ」  
「が・・」

『それ、さっきハナシしただろうがよ』

「ウォーロックちゃん、話してちょうだい。  
情報はできるだけ共有したほうがいいわよ」

『うわあ〜やめてくれ、その呼び方。背筋がぞつとするんだ  
よ』

「だったら話してちょうだい、ウォーロックちゃん」

『わかった、わかったからよ、その呼び方はやめてくれよな』

・  
・  
・  
・  
・

『これはな・・・・・・・・・・・・・・・・だよ』

会議終了後~~~~~

『あゝあつ、帰るぜ俺は』



「ちょっとまってよ、ウォーロック。狙われてるのよ」

『ミソラのいうとおりよ、待ちなさい』

『………わかった・わかったからよ……だから……

………泣くのはやめてくれ』

「だ、だって………うう………」

ミソラが涙声で話す

「ス、スバルくんが、もう帰ってこないのかもしれないんだよね」

「そんなことないさ………」

3人の前にあらわれたのは・・・

「えっ・・・・・・・・もしかして・・・・・・・・スバルくん？」

「ただいま・・・・・・・・ミソラちゃん」

「す、スバル君・・・・・・・・」

「ごめん、心配かけちゃって」



『て、てめえ、どっいっことだ！……！……！』

帰ってきた男（後書き）

すみませんタイムアウトしそうで、内容が・・・

## 最後の抵抗

『ミ・・・ミソラ』

・・・反応がない

「はははっ、おどろいた？もうこいつの体の主導権は俺にあるんだよ」

『・・・なんで攻撃した・・・』

ウォーロックの問いかけにも・・・

「愚問だねー、俺以外に電波変換されたら邪魔じゃないか」

『ウォーロック！ミソラは任せて！』

・・・シュッ・・・

「だめだよ、そんなことしちゃあ。」

エンペルはハープを追い詰めた。そして・

「一緒にあの世へ逝ってきなよ」

『ハープッ！！！』

バトルカード キヤノ…………ウッ……

(…………ハープ、逃げて、ミソラちゃんを…………)(

『エッ？』



「クッ、いったん退却だ・・・」

『待ちやがれ、ブツた切つてやる』

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

『……俺は、スバルがいねえと何もできねえのか……』

~~~~~宇宙空間~~~~~

「ふん、いいところを、邪魔しやがって」

（ぜったいにさせない）

「？・・・ああ、わかった、わかった」

（なにをするつもりだ）

「・・・お前の人格、知識、記憶、全てを・・・消してやる」

（ぜったいに・・・させるもんか！！！）

「おいおい・・・そんな抵抗は無駄だぜ！・・・ハアッ！！！」

（うああああああああああっ・・・・・・・・・・・・・・・・）

（

「・・・どうだ、気分は」

（・・・）

「話し方も忘れてしまったのか、ハハハ」

・
・
・
・
・

「くっくくくく、これでFM星を滅ぼせる

・父さん、見ていてくれよ。敵を討つてやるからな」

出来ること

病院~~~~

「ミソラちゃん、大丈夫」

ハーブは電波体であり、病院の機器に誤作動を起こしてしまう恐れがあり

代わりにスバルの母が付き添っている。

「.....」

（まさか、スバルがミソラちゃんに攻撃するなんて）

.....

（ミソラちゃん.....ちゃんと目を覚ますのかなあ.....

お願い.....生きていて）


~~~~~病院の外~~~~~

『ミソラあ……………』

『はあ……………スバル』

……………

~~~~~WAXAニホン支部~~~~~

「長官、シドウちゃん、結果がでたわよ」

「・・・・・・・・これは・・・・」

「エンペルの電波反応を基にして分析したのよ。
この動きだと・・・・・・・・FM星でしようね。」

「・・・・・・・・」

「いま、FM星には地球からの使節団が滞在しているわ。
その宇宙船とここの電波をつなぐことができれば・・・・。」

「それは、いつ・・・できるんですか」

「あら、いい質問ね、シドウちゃん。

こっちからだけでやったら、丸一日はかかりそうね。
そうだと、こっちが行くころにはもう、FM星はなくなってるかもね」

「ヨイリー博士、何とかならないんですか？」

「使節団のメンバー表をみてごらんよ」

「・・・・・・・・・・星河 大吾・・・・・・・・・・天地まもる・・・・・・・・・・」

「

「この二人と協力すれば、3時間ぐらいでできるわ。
でも・・・・・・・・FM星にいけるのは、1人だけよ」

「なんで」

「もろいのよ、たぶん一回踏むと、道がくずれていくわだから、その1人のメンバーを選んでちょうだい。それが、今のあなたたちにできることよ！」

「わかりました……では・行つてまいります」

出来ること（後書き）

誰がしゃべってるのかわかりづらいかもしれません。

決意

病院の外~~~~~

『うつうつ・・・ミンラ~~~~』

『・・・ハープ、泣いている場合じゃないぜ』

『何なのよ、ウォーロック、あなたには私の気持ちかわからないのよ!~』

『エンペルがFM星へ移動している・・・』

『えっ!~?』

『・・・・・・・・FM星に行くてくる』

『なんで？あなたが行っても無駄よ、戦えないでしょ！？』

『・・・・・・・・今の俺にはな、お前の感情がわかるんだよ・・・・』

スバルと過ごしているうちに、今までわからなかった他人の気持ち
持ちが・・

・・・・・・・・お前がミソラを心配しているように・・・・

俺もスバルが心配なんだよ。それに・・・・』

『・・・・・・・・それに？』

『FM星人と地球人との間には、ブラザーバンドがあるんだ・・・
・・・スバルと大吾が結んだな・・・』

俺は・・・スバルのウィザードとして、その絆を守りてえんだ。』

ウォーロックは、すでに腰を上げていた。

『・・・わかったわ、じゃあ私はミソラを待つわ

・・・地球は任せといて！』

『・・・じゃあな！』

――ウオーロックは飛び立った――

~~~~~そのころ・・・WAXAニホン支部~~~~~

「シドウちゃん、決まったの？」

「はい、俺とアシッドで行くことになりました」

「・・・そう、でもね・・・ちょっと遅かったわね」

「どっという意味ですか」

「・・・だれかが、このウェーブロード上を使ってるわ」

「・・・誰がですか」

「この反応はおそらく・・・」

~~~~~病院・中~~~~~

（ちょっと飲み物買ってこようかな）

「ちょっと行ってくるね、ミソラちゃん」

・・・・・・・・・・・・・・・・チラ・・

「・・・・・・・・よし、スバルのお母さんには悪いけど・・・・・・・・」

運よくミソラの部屋は1階であつたため・・・・・

「この窓を・・・・・・・・・・」

ミソラは難なく窓枠を飛び越え、

『・・・・・・・・ミソラぁ・・・・・・・・』

ハーッ！！！！！！！！！

『ミソラっ！？何でここに・・・・・・・・！？』

「あなたたちの会話丸聞こえよ！

・・・・・・・・ウォーロックを追いかけるわよ、さあ！」

『
．．．．．それは無理よ．．．
』

秘密兵器

「なんでよ、ハープ、いいじゃない」

『・・・・・・・・無理よ・・・・・・・・いまのあなたじゃ』

「大丈夫よ、傷なんてもう治ったし」

『・・・・・・・・』

「ねえ、ハープ、なんで、なんでダメのよ!」

『・・・・・・・・助けない気持ちはわかってるの』

・・・・・・・・でも、これ以上無理したら、あなたの体が耐えられないわよ』

「死ぬ覚悟はできているわ．．．だから．．．お願いっ！！」

『．．．．．はあ。』

「ハープ？」

『ミソラ．．．あなたには負けたわ．．．．．』

「・・・じゃあ」

『ただ・・・約束して。』

もし、あなたの体が耐えられなくなったときは、電波変換を解くって』

「うん、約束する」

『じゃあ、いくわよ』

「電波変換、響ミソラ、オン・エア！」

シュツ・・・・

・・・そのころ、病院・中・・・

（ミソラちゃん、どうなのかな）

ガラガラッ・・・・

「えっ？いなくなってる、どこ、どこにいの、ミソラちゃん！？」

「ここが宇宙かあ・・・」

『こっちよ!!--!!--!』

カツ・・・

何かが光った、すると・・・

「・・・ダレだ・・・」

「えっ、あつ、あなたは・・・」

『・・・ブライ!!!!!!!!!!・・・なんでここに』

「フン・・・」

パシュン・・・・・・・・

ブライは一瞬で消えていった・

「見て！ハーブ」

『この道は・・・・・・・・ウェーブロード？』

「・・・・・・・・消えていく・・・・・・・・」

『とにかく急ぐわよ、ミソラ』

「ええ！」

~~~~~WAXAニホン支部~~~~~

「現在、3つの電波を確認、  
・・・ウォーロック・・・ハープ・ノートそして」

「ブライちゃんね」

「ハ、ハイ」

「シドウちゃん!!--!」

「はい!」

「今すぐ準備して!

こんなこともあるのかと、秘密兵器を用意しておいたのよ」

「秘密兵器・・・？」

「こうなったら、宇宙船に直接アシッド・エースを送り込むわ！」





## 秘密兵器（後書き）

今とにかく書きまくってます

## 助っ人（前書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。  
おかげで、アクセス数が6000を突破しました。  
これからも更新するんでよろしくお願いします。

## 助っ人

F M 星~~~~~

「……天地君、状況は？」

「いまのところは………あつ、  
……なにか近づいてきます」

お~~~~い、大吾~~~~お

「ウォーロックじゃないか、よくきたな」

『まあ、ここにはずっと住んでたからな』

「ははっ、そうか。」

『ところで何してんだ』

「ああ、今さっき WAXA からの通信で  
敵が近づいているからきをつけなさいね大吾ちゃん、ってきた  
から

このホシに近づいてくるものを観測しているのさ  
でもこんなしゃべり方の人って WAXA にいたっけ？」

《絶対にヨイリーだ！！》

「ところでよ、ウォーロック」

『なんだ？』

「・・・スバルは無事なのか」

『・・・さあな。まあ、俺はスバルを追ってきたが  
まったく波長が感じられねえ・・・』

「そうか・・・」

ウォーロックーーーー

『ハーブじゃねえか、いいのかここに来て』

「ウォーロック、私なら大丈夫よ！」

『ミソラが、どくくしてもスバル君と居たいからって』

「あゝ、君があゝの響ミソラちゃんか」

「大吾さん、お久しぶりです」

「スバルからハナシは聞いてるよ」

「へえ、そうなんですか？」

「・・・大吾さん、来ました。奴です」

『ハッハッハ、久しぶりだな、大吾よ』

「そうだなあ、エンペル。まさかこんな形で裏切られるとはな・・  
」

『裏切る？ふん、裏切ったのはケフェウスの野郎だぜ・・  
・・・おや、そこにいるのはウォーロックじゃないか・』

『ケツ、さつさとスバルを返しやがれ！』

『まあ、待て。こいつはな・・・・』

・・・・ブライナックル!!!!!!

ガン・・・・・

『クツ、おまえは・・何者だ』

「……ブライ。ロックマンを倒すのは、この俺だ!!!!」



「っ

『・・・・・・・・ハッハッハッ』

「何がおかしい」

『さっきの攻撃が俺に効いたとでも?』

「どういふことだ」

『AM星人やFM星人のような、劣った電波体にはわからんだろう

俺を含むPM星人はな、ダメージを全て・・・・・・・・

・・・電波変換する媒体が受けるんだよ」

・・・

『おい、大吾、どういうことだ!?!』

「・・・つまり、やつが受けるダメージはスバルが負うと  
いうことだ」

『・・・クッ、大吾・・・いったいどうすりゃいいんだ』

ウォーロックはいつになく苦悩した様子だ

「ひとつ．．．．．方法がある．．．．」

．  
．  
．  
．  
．

「．．．．ウォーロック、おまえがスバルの中からエンペルを倒す  
．  
．  
．  
．  
．それしかない．．．．」

『・・・なるほどな・・・』

それで俺がスバルのカラダをのっとりゃあいいわけか』

「・・・いくぞ、ブライ、エレキスラッシュ!!!!!!」

『ふん、ござかしい、ラプラス!!』

ラプラスが剣の形に変化する・・・

『ラプラスソードっ!!!!!!』

ガキン!

「大吾さん、できました!!」

「ナイスだ、天地! ウォーロック、行くぞ!!」

『・・・何をするんだ!?』

「宇宙船の電波通信装置を利用して、お前をスバルに転送する!」

『・・・もうおわりか？ブライくん？』

「・・・油断したな！」

！！！！！！！！！

「ブライアーツストレート、フック、アッパー……」

……スバルのカラダにめり込んでいく!!!

・  
「転送準備率、70、80、90パーセント……100つ……」



「  
．．．．．サ  
マーソルトキッ  
ク！！！！！」

『  
グ  
ワッ  
．．．．．！  
』

「今だっ！！！！！！1」

「いけえウォーロック！！！！スバルを取り返して来い！！！」

『まかせとけ！！！！！！』

「転送！！！！」

パ  
シ  
ユ  
ッ  
!  
!  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.

ウォーロックvsエンペル

．．．．．スバルの体内．．．．．

『ここか．．．．．』

キャノン！！！！！！

『ウワツ．．．．．アブねえ』

『チツ、外したか』

『．．．．．エンペル！！！！』

『どつやってきた！？』



『エレキスラッシュュ!!』

キーン……………

(……………何か聞こえる……………)

『……………クッ、分が悪すぎる……………』

『フッフ、さっきまでの威勢はどこに行った、ウォーロック』

(・・・ウォーロック・・・?)

『まだだあ!!!! スバルを返せエ!!!!』

(・・・スバル・・・・・・・・そうか・・・

ぼくを・・・・・・・・助ける・・・・・・・・ために・・・・・・・・  
・)

『ウォーロック!とどめだあ!!!!!!

俺はFM王を倒し、王となる!!!!!!』

(・・・ウォーロックが・・・・・・・・危ない!!!!!!)

『・・・・・・・・ここまでかつ・・・・・・・・』



『っ・・・・・・・・ウオオオオオオオオオ！』

『な、なにが・・・・・・・・』

「ウォーロック！！！！！」

『ス、スバル！！！！』

「ぼくは大丈夫！！！！・・・早く逃げ・・・て！！！」

『・・・・・・・・エンペルは・・・』

「．．．エンペルは．．．も、もう．．．．．すぐ．．．．．  
き．．．」

『スバルッ！．．．．．クッ、拒否反応が．．．おれにも．．．．．』

パシュン――――

「ブライ、大丈夫!!!」

「………フン、」

『なによ、ミソラが心配してあげてるのにつ』

「キューーーーーン……………バーーーーーン」

『ウォーロック!!!!!!』

「スバルくんは……………」

『ああ、もう…………心配ないぜ、

だが……………」



ウォーロックvsエンペル(後書き)

タイムアウトです

行け!!!

「だがな、って何？教えてよウォーロック！」

『ミソラ!!!あれ!!!』

ハープが叫んださきには・・・

「ミ・・・・・・ソ・・・・・・ラ・・・・・・ち・・・・・・  
や・・・」

「スバルくん!!!」

バタツ・・・・・・

倒れたスバルにミソラ達は駆け寄った・

「意識がない・・・」

すると、大吾も駆け寄ってきて・・・

「・・・・・・・・大丈夫、まだ脈はある・・・」

『とにかく・・・どこか安全な場所に』

「そうだな、ハープ・・・」



よし、ミソラちゃんは天地と、スバルを宇宙船に運んでくれ」

「はい、わかりました」

「よし、任せた！」

ウォーロック!!!」

『なんだ？おれは宇宙船には帰らねえぞ！』

「・・・俺は、このホシのブラザーバンドの責任者だ

・・・一緒に戦うぞ！」

『・・・わかったぜ、よし・・・！』

「待ってください、私も戦います！」

ミソラは言った

「いや、ミソラちゃんは、スバルの側にいてくれ。」

「で……でも……」

「また、FM星人が襲ってくるかもしれない。」

「……そのときに、スバルを守ってやってくれ……頼む！」

「…………わかりました」

「ただ……大吾さんも、絶対戻ってきてくださいね!!」

『ケッ、俺はなしかよ』

『ウォーロックもよ』

ハープがフォローする。

「わかった

ウォーロック、いまエンペルはどこにいる?!」

『・・・・・・・・FM王の宮殿に向かってやがる』

・・・・・・・・急ぐぞ、大吾!!!!」

「マテリアライズ、スカイボード!」

『そんなので俺のスピードについてこれるのか?』

「はは、このスカイボードはWAXA特製品でな、

最高で300キロ出るんだよ」

『まあ、たいしたことねーな。落ちて怪我すんなよ

・・・スピードは落としてやつから・・・』

ビューーーーーン~~~~~

「――せうじやう」

行け!!! (後書き)

なんとか今日でFM星編を終わらせるつもりです



侵入者

宇宙船内~~~~~

「・・・・・・・・スバルくん・・・・・・・・」

「・・・・・・・・よし、スバル君をここに乘せてくれ」

「・・・・・・・・ハ、ハイ・・・・・・・・」

ミソラは、天地の指示に従い、スバルを台の上に乗せた

「・・・・・・・・これは、何ですか？」

「これは、自動生命維持装置、昔で言うAEDみたいなもので

のせた人の生命の維持を、自動で手助けするものなんだ」

「じゃ、じゃあ、スバルくんは助かるんですか？」

「まだわからない……」

なんせ、けっこうなダメージをくらってたからな……」

「……………」

．．．．．そのころ．．．王の宮殿――――

バタツ．．．．．

『．．．．．警備があまいぜ．．．．．』

「ここか．．．．．キイーツ．．．．．」

『．．．．．ケフェウス！！！！！』

『よくここまで戻ってきた．．．エンペルよ』

『さつさと首をよこせ！！！！』

『いいだろう・・・だがその前に私の話を聞いてくれ・・・』

## 侵入者（後書き）

すみません、編集の都合上短くなってしまいました。

## 真実

『昔、ランバルという科学者がいた

その科学者は当時、よの右腕のような存在であった

よは、ランバルをとても信賴していた

だが、ランバルはよのみえない所で、ある計画をたてておった

……PM星滅亡計画……

そしてランバルはよの知らぬうちに

アンドロメダという兵器を作り出し……PM星を滅ぼした

そのことは知らず、濡れ衣を着せられたよは

犯人を調べ上げ……ランバルを捕まえ、処刑した

そしてよは、以後誰も信用できなくなった

ランバルを処刑した後もよは極秘に調査を進め、……

……FM星にランバルの息子がいることをつきとめた

しかし、行方がわからぬまま・・・調査は終了した

そして、半年前、F M 星の政治的地位を駆け上がってくるものがいた

・・・かつてのランバルのように・・・

そして、波長をかんじたとき・・・よは確信した

ランバルの・・・息子だと



・・・それが、そなただったのだ。エンペルよ』

『う、うそに決まっている!!!!!!』

『いや、それは、そなたが知らされていなかったただけなのだ

そして、2ヶ月まえ、そなたはよの右腕になった

・・・以前のよであれば、訳もなく殺していたであろう

だがよは、そなたを信じた、

・・・そなたの電波変換していた星河スバルのおかげでな」

『う、うそだ、おれの父さんと故郷は、ケフェウスによって奪われた

そうして今まで生きてきたんだ・・・！』

キイイイ~~~~ツ・・・

「ケフェウス王！！！」

『ケフェウス！！！！いま、エンペルが・・・・・・・・・・』

大吾とウォーロックが入ってきた……

『……エンペルよ……よを信じてくれ』

『うそだ、うそだうそだうそだあ~~~~~』

《大吾、いったい何がおこってるんだ》

（さあな、ただ、もう決着がついたみたいだ……）

『も、もし、そのハナシが本当なら……』

エンペルは涙ながらに言う

真実（後書き）

タイムアウトです。 . . . . 続きます

## 王の資格

．．．．．申し訳ないっ！！！！ケフェウスさまっ！』

うつうつうつ．．．．．

もうエンペルには立ち上がる力もなかった．

下を向いたまま．．．ただ．．．泣き崩れている．．．

『星河大吾とウォーロックではないか！

．．．．よはまた、そなた達に救われた』

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

『……大吾、スバル、ウォーロック。

そなた達の紹介してくれたブラザーバンドのおかげだ』

すると、エンペルは立ち上がり……

『私は、王に刃向かった。処刑をして、罪を償わせてください』

『……罪を償いたいのなら……』

・  
・  
よ  
の  
後  
を  
継  
げ  
」

[illegible]

よ のホシは、地球とブラザーバンドを結んだ

そして、今日、ついに完成した……  
□

- 
- 
- 
- 
- 

「・・・ よにはブラザーバンドを国じゅう、宇宙じゅうに広める

・  
・  
・  
・  
使命がある。



ブラザーバンドの第一歩は、国民に理解してもらうことだ

・・・間違った理解をされないためにも

よ 自身が国じゅうを歩き回り、考えを説かなければならない

そのためには、いつまでも王の座にいてはいけないのだ

だが、やめるには安心して任せられる後釜がいる・・・

それが、そなたなのだ、エンペル』

『しかし．．．．私は過ちを犯した．．．．』

『．．．．そなたの気持ちはわかっている

よ　も過去に過ちを犯した．．．

しかし、そんな　よ　を許し、さらに信じてくれた人がいた

．．．．そして、よ　とブラザーになってくれた

・ ・ ・ ・ ・ もう一度言う

よ はそなたを信じる だから そなたも よ を信じてくれ

そなたには王の資格がある よ が認めたのだ

きつとそなたは よいホシにしてくれるであろう

だから……よ  
のあとをついでほしい……』

『・・・・・・・・安心して、後はお任せください・・・・・・・・』

エンペルの顔からは、すでに恨みや憎しみは消えていた・・・

## 帰還

『ウォーロック、星河大吾、申し訳ない・・・』

・・・星河スバルは大丈夫なのか？』

エンペルが素直に謝る

「・・・スバルは今・・・意識がない・・・」

はやく地球で治療しなければ・・・」

『・・・よし、そなた達に宇宙船を分けよう』

そしてケフェウスは、部下に指示をして  
宇宙船を運ぶよう命じた

「・・・その宇宙船だと、何日かかりますか？」

『・・・30分だ』

「さ、30分!？」

大吾は驚いた。地球の宇宙船でFM星に行くには、1週間を費やす

『さあ、はやく星河スバルのもとへ・・・』

エンペルも彼らの手助けを・・・』

『いや、それは必要ねえ』

ウォーロックだ

「ケフェウス王、また来ます」

『ああ、頼む』

『ウォーロック、また来いよ』

・・・星河スバルと』

『フン・・・スバルが生きてたらな・・・』



．．．．宮殿・外．．．．．

プルルッ、プルルッ．．．．．

「大吾さん！宇宙船が．．．いきなり運ばれてきて、それから．」

「まあ、そうあわてるな天地

スバル、ミソラちゃん、天地はFM星の宇宙船で！

地球の宇宙船は、俺とウォーロックで乗って帰るから！

じゃ、頼んだぞ！」

「ちょ、ちょっと、だ．．．．．」

ブツンーーーー

「よし、ウォーロック、帰るぞ地球へ！！！」

『よっしゃあ~~~~』

・・・宇宙船・・・

「す、す、すい・・・・・・」

「ねえ、ベッドはある？」

『ソレナラ、ココニ。テツダイヤモンドウカ？』

「ありがとう」

よいしょつと．．．．．

デンパくんと一緒に、なんとかミソラはスバルを寝かせた．．．

（あと30分の我慢よ、がんばって、スバルくん！）

そして、宇宙船は地球に向けて動き出した．．．



## 帰還（後書き）

F M 星編終わりです。読者の皆さんのおかげで、アクセス数 8000 件を突破しました。部数が多く、読みづらいこともあると思いますが、これからもよろしく願います。ストーリー、あそこはこうしたほうがいい（効果音や人物の表現の仕方が下手なので、教えていただきたいです）など、意見や感想を待ってます。

あかねとミミ

「……………」

バツ…………

『おはよう ミミ』

「ハープってあれ？」はと

『ここはスバルくんの部屋よ』

・ガチャッ・・・

「あら、ミソラちゃん、やっと起きたのね」

「（スバルの）お母さん！」

「ふふふ、ミソラちゃんったら、寝すぎよ

もう、3日間も寝てたのよ」

「み、3日！？」

「そうよ、あなただったらスバルを、私が運びますっ！、って

病院まで運んでくれたのはいいんだけど、スバルが手術室に入  
って

私と一緒にイスに座って待っていたら、私を膝枕にして寝てた  
のよ」

「へえ、そうだったんですか・・・で、スバルくんは？」

「スバルなら、まだ集中治療室にいるわ



けっこう重傷みたいで・・・」

「・・・スバルくんにつき添わなくて良かったんですか？」

「それが、スバルがなんだか関係者以外立ち入り禁止ってところに搬送されて

スバルくんは大丈夫だからあかねさんは響さんをよろしく願います、

っていわれたから・・・」

「・・・そうだったんですか・・・」

「・・・ありがとね、ミソラちゃん、スバルを助けてくれて」

「・・・でも、わたしだけのチカラだけじゃスバルくんを・・・」

「ふふふ、あなたのそういうところが好きよ」

「・・・えっ・・・？」

「ふふふ、ご飯できているから食べなさい」

「は、ハイ」

時計は、正午を回っていた・・・

## 病院

・プルルッ、プルルッ・・・・・・・・

「はい、星河あかねですが・・・・・・・・

・手術が・・・・・・・・はい・・・・・・・・わかりました

・・・・・・・・ハイーーー失礼します」

「お母さん、どうしたんですか？」

「ミソラちゃん、ご飯たべたら、病院に行くわよ！」

「・・・・・・・・ということは・・・・・・・・」

「スバルの手術が終了したって

意識さえもどれば、退院できるそうよ！」

「……………」

（……………や、やったあ——）

ミソラは声にはならないくらい喜んだ

やっとスバルに会える

冬休みになったら、また2人でデートするんだ

パフェ……………焼き……………焼肉もいいなあ……………

「ミソラちゃん、顔にでてるわよ」

ミソラの顔は、笑みがほころんでいた

たぶん、いろんなことを考えていたからであろう

「ふふふ、やっぱりミソラちゃんはスバルのことが好きなのね」

「え、えっ……！？そ、そんな……」

だって……スバルくんの……ブラザーですから……」

ミソラの進んでいた箸がとまった

かなり動揺していたらしい・・・

「ミソラちゃん、ほおに米粒ついているわよ」

「・・・あっ・・・」

『ミソラはスバルくんのことばかり考えていたのよねーっ！』

「うっ、うるさいなあ、ハーブ」

『あら、凶星だった？』

「もーっ」

ミソラの顔は、すっかり赤くなっていた……そして……

~~~~~  
2時間後……病院~~~~~

「502、502号室・・・・・・・・二二ね！」

ガチャッ・・・・・・・・

あかねとミソラはスバルのベッドに近づき・

「スバルったら、まだ寝てるわ・・・」

あかねがスバルの顔を覗き込む・

「じゃあ、なにか飲み物かってきましようか？」

「いいわ、ミソラちゃん。私が買ってくるから、

「ここで見ている」

「・・・あ、じゃあ、お願いします」

「・・・ガチャっ・・・」

（スバルくん・・・）

・
・
・
・
バ
サ
ツ
・
・

「わあああーっ」

•

スバルがいきなり体を起こした

(び、びっくりした〜)
(

「ス、スバルくん・・・おはよう・・・」

「きみはだれ？」

異変

「ミソラちゃん、飲み物買ってきたわよ

．．．．．あれ、どうしたの？」

「スバルくんが．．．．．スバルくんが．．．．．」

「スバル、起きてたの、もう、心配．．．．」

「．．．．．?????」

スバルは本当に何もわからないらしい

「・・・・・・・・・・・・・・・・どうしたらいいのかしら」

・・・・・・・・ガチャッ・・・・・

「星河さん、ちょっと来ていただきたいのですが・・・・・・・・」

スバルの担当医だった

「ミソラちゃん、ちょっとスバルをお願いね」

「…………ハイ…………」

ミソラの心は再び地獄に落とされていた

怪我をしながらもスバルを助けるためにFM星まで行き

帰ってきて、やっとこれからスバルと遊べる…………

しかし、スバルは自分のことを覚えていない…………

「・・・うわあああゝゝん」

ミソラは、これまでためていた感情を爆発させ・・・

「ど・・・どうして泣いているの?」

「・・・グスッ・・・」

ほ・・・本当に・・・なに・・・も・・・おぼえて・・・ないの
?」

「う、うん・・・・・・・・・・ただ・・・」

「・・・・・・・・ただ・・・・・・・・？」

「ただ、なにか大切なことを忘れているんだ・・・」

それだけしか・・・・・・・・覚えてない・・・・・・・・」

「・・・・・・・・大切な・・・・・・・・こと・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・そう、なにかを・・・・・・・・つたえないと・・・・・・・・」

「……つたえる……？」

「ミソラちゃん、帰るわよ」

「え……スバルくんは？」

「スバルもよ」

……

「では、何か異変があれば、また来てください」

「はい、ありがとうございました」

あかねは医師に礼を言った後、ミソラ・スバルと帰っていった

「・・・お母さん・・・」

「なに？ミソラちゃん？」

「・・・あの、お医者さんと、何を話していたんですか？」

「いいわよ・・・じゃあ、話してあげる

それはね・・・

~~~~~FM星~~~~~

大吾はFM星の造船技術を学ぶために、天地らが帰ってからも3日間滞在していた・・・ウォーロックと

そして、地球に帰るとき・・・

「では、FM星のみなさん、ありがとうございました」

・・・また来てくださいね・・・  
・・・ご馳走してやるぜ！・・・

FM星の住人が見送りに来ていた

「・・・ところで、大吾さん・・・」

声の主はエンペルだった・・・

「スバルという地球人のことだが・・・」

「・・・どうしたんだ？」

## 記憶

．．．．．地球．．．．

どうやら、スバルの脳の一部が．．．動いてないの」

「．．．脳が．．．動いてない？」

「動いてないっていつても、ちゃんと生きてはいるの

ただ．．．．その理由がわからないらしいのよ」

「．．．．．もしかして、その脳の一部っていうのは．．．

．．．．．記憶を扱っているところですか？」



「様子を診たらそうらしいって。

治療法はわからないんだけど、病院にいても寝るだけだから、

家でいろんなことをさせて様子を診てください、だって。」

「……………そうなんですか……………」

するとミソラが……

「……………きょうから少しの間……スバルくんと……

「……一緒にいてもいいですか？」

あかねは満面の笑みで

「もちろんいいわよ、スバルの世話、頼むわね！」

「はいっ！がんばります！」

~~~~~そしてFM星~~~~~

『スバルと電波変換しているとき……

……記憶を消そうとした』

「……………」

『しかし、消すことはできなかった、

だから俺は、スバルの記憶を一時的に麻痺させた

そのため、スバルが生きていてもしばらくは、記憶は戻ってこない』

「・・・どれくらいで戻るんだ？」

大吾が聞く

『早くて10年、最悪一生戻らないかもしれない・・・』

「・・・じゃあ、どうすれば・・・」

『・・・大吾さんがいる3日間で、これをつくった

これは、スバルの脳に打ち込んだ電波と真逆の性質の電波を帯びた薬だ

これを飲ませれば、早く直せるかもしれん』

そう言つとエンペルは、カプセル状のものを渡した

「……………ありがとう……………」

『ただ、副作用があつて、それを飲むと頭に激痛がはしる

だから念のため、副作用の軽減のための薬も作つておいた』

エンペルはタブレット状のものを渡した、すると……………

『それって、バファ ンじゃねえのか』

ウォーロックは、相変わらず空氣が読めない

「じゃあ、エンペル、そろそろ帰るよ」

『・・・じゃあ、スバルによろしく』

『・・・おい、また無視かよ・・・』

いつも無視られ役のウォーロックであつた・・・

付きつきり！

~~~~~家にかえつて2時間後・星河宅~~~~~

現在の時刻：PM 8時

「はあ~~~~疲れたあ~~~~」

ミソラは、スバルの部屋の回転イスに座った

「.....ホシ.....」

「えっ？なんて？」

「.....」



スバルは無口のままだ。

どうやら、まだミソラに人見知りをしているらしい

ベッドの上の大きな窓から星を眺めている

「あれっ？」

ミソラが手に取ったのは、ミソラのCD。

（そっか……応援してくれてたんだ）

ただいま

下から大きな声が聞こえる

たぶん、大吾だ

「おかえりなさい、大吾さん

ロックくんも一緒だったのね」

『…………おフクロ、スバルはどこにいる？』

「いま部屋にいるわよ、ミソラちゃんと一緒に」

「…………ウォーロック、まかせたぞ……」

『まあな、大丈夫だ、もっていつてくるぜ』

スーーーー

ウォーロックは、スバルのいる部屋へと行った

「あかね、ご飯にしようか」

「え、ええ」

~~~~~スバルの部屋~~~~~

「・・・・・・・・」

スバルはホシを眺めている・・・・・・・・

「あゝあ、どうしよう、ハープ？」

『うゝん、わからないわ・・・』

スバル！！！！元気か！！！！！！

『うるさいわよ、ウォーロック！』

もう夜の8時よ！！！！』

「ハープう、まだギリギリ許される時間じゃないかなあ」

『・・・そうかしら？』

『スバルウ、薬持ってきてやったぞ』

「・・・！？わあ！だ、だれ！？」

（だいぶ頭がいつちまってるな
まあ、少々強引にいくか！）

「があっ、な、なにすんのさあ」

ウォーロックが、スバルの後ろから口を強引に開かせる

『よっしゃあ、ミソラ！ハーブ！お前らも手伝え！』

「ウォーロック、なにそれ？」

『クスリだよク・ス・リ、飲ませたら記憶が戻るらしい』

「ほ、ほんとに？」

『ああ、ホントだ、FM星で貰ったんだ

だから早くてっだえ〜！！！！』

「・・・わかったわ、ハープも手伝うのよ！！」

『はい』

「ふあふあふあ・・・い、いたい、は、放せ~~~~」

(スバルくん・・・ごめんね)

・・・ごくん・・・

『はあ~~~~っ、やっとクスリを飲みやがったぜ』

「手ごわかった・・・」

はあ~~~~~

スバルの部屋に、やっと静けさがもどった……

……だがその平和はまもなく破られる……

「わああああああつ、あたま、頭が――――」

付きつきり！（後書き）

タイムアウトです

記憶回復？

「ス、スバルくん！？」

『・・・よし、今度はこれを飲まずぜ！』

そしてウォーロックは白い錠剤をとりだした、すると・・

「・・・えっ、それってもしかして・・・」

『・・・バファ ン？』

『違う、これは副作用を治すクスリだ！！！！』

さっさと手伝いやがれ！！！！』

(・・・スバルくん、ごめんね)

うわああああああああああっ・・・

~~~~スバルの夢の中~~~~

.....スバル.....スバル.....

「き、きみは.....」

.....もう.....限界だ.....

.....はやく.....助けに.....

「待つて！きみがまた.....どうやってこの時代に.....」



『なんだ、記憶が戻ったのか？』

「うん！」

「……スバルくん、いったいどうしたの？」

下から声がする……

「えっ？きみは……」

「も~~~~オ」



(やっぱ、まだ記憶が戻ってないのか……な)

ミソラはありったけのタオルを下に敷き、寝ていた・

スバル~~~~起きなさ~~~~い

「あつ、母さんだ」



スバルは元気よく学校へ向かった

・・・ボタン・・・

「よかったわ、記憶が戻ってくれて・・・」

「・・・」

「そんな落ち込むことはないわよ、ミソラちゃん！」

絶対に覚えてるから、スバルはミソラちゃんのこと！」

「・・・ハイ」

「・・・じゃあ、ミソラちゃんに元気だしてもらったためにも

片付け終わったら、買い物でもいきましょ！」

「ハイ・・・じゃあ、準備してきます・・・」



記憶回復？（後書き）

バファンのくんだり、またやっちゃんいました

## 終業式

~~~~~学校・教室内~~~~~

『きょうは人が少ないな』

「まあね、今日は早く起きたし」

『スバルに起こされる日が来るなんて思ってもみなかったぜ』

ハハハハハ・・・

「あら・・・久しぶりね、星河くん」

「い、委員長、ひさしぶり」

いつみても委員長のオーラはすごい

「おい、スバル？おまえ、ドコいったんだ？」

「いや、それが……………覚えてないんだ」

『ゴン太、なんなら、このウォーロックさまが教えてやるぜ』

キンコーンカーンコーン……………

「すわりなさい！」

委員長の声が響く

ガラガラッ・・・

「えーと、今日は終業式で、明日から冬休みに入る。

まずだな・・・」

先生のハナシ、通知簿の配布・・・が終わる・・・

「では、今日はこれで終わる。

くれぐれも怪我だけに気をつけてな！」

~~~~~放課後~~~~~

「星河くん、ゴン太、キザマロ！」

「は、はいっ！」

「なんだ、委員長？」

「……」

「前に言ってた冬合宿のことだけど、

私のプランを発表するから、いまからスバルくんちに集合ね」

「え、ぼくんち？」

「……いやなの？」

委員長の威圧感をひしひしとスバルは感じた……

「……どうぞ、ぼくの家でよければ……」

「きまりね！―じゃあ、いくわよ！―」

~~~~~そのころ~~~~~

「うわああああ、スバルくんの・・・ばか~~~~~っ」

「み、ミソラちゃん、落ち着いて・・・」（あかね）

パクパクパクパク・・・・・・・・・・おかわりっ!!!!!!

「あの、おなか、大丈夫ですか？」（店員）

「まだ20杯目よ、フジヤマパフェをちょうだいっ!!!!!!」

「は、はいっ！！！」 (店員)

元気(?)を取り戻したミソラであった・・・

旅行

「ただいま……あれ？」

「あかねさんは、留守？」

「……そうっぱいね、まあ、上がってよ」

……失礼します

……ぐぐぐぐぐ……

「なあ、スバル？なんか変な音がしないか？」

ゴン太が尋ねる

「……たぶん……父さんのイビキだよ……」

「・・・そうなのか？」

「星河くんのお父さんがイビキかくって、意外ですね」

キザマロが言った

~~~~~スバルの部屋~~~~~

「では、私のプランを説明するわ」

ゴクン・・・

「・・・・・・・・・・ウキウキ地方の都市・古都を巡る旅4日間よ  
」！

「旅なの？合宿じゃなくて？」

「そうよ、星河くん、これは合宿じゃないわよ

旅よ、旅。まあ、たまにはリラックスしてもらおうかと思って  
ね」

………一同は黙ったままだ

「なに、やっぱり合宿がいいわけ？」

「い、いや、そんなことないよ、ね、ゴン太？」

「おう、スバル、そのとおりだぜ、な、キザマロ？」

「え、ええ、委員長がぼくらのことを考えてくれているなんて・・



ホントに光栄です、ねっ、ウォーロック？」

『・・・・・・・・なんでオレなんだよ・・・・・・・・』

「じゃあきまりね！」

その旅には明日からいくわよ」

「えっ、明日？」

「なーに、星河くん？ やっぱり、い・・・」

「す、スバル、善は急げって言うし、いいよな」

「あ、うん、そうだねゴン太・・・」

「ゴン太くん、なんか使い方間違えてるような、ないような・・・」

「

「よし、じゃあ明日9時、ウェーブライナーの駅前集合ね!」

・・・はい!

「じゃー解散!」

・・・失礼しましたー!ー!ー!

「あゝあ、明日9時か……」

『なんかあるのか、スバル』

「……いや、特にはないんだけど……」

……ただいま……

「おかえり、かあさん。……あれ、もう一人の……」

「ミソラちゃんね。明日仕事があるからって帰ったわよ」

「へえ、そうなんだ。ところでさ、明日……」

スバルは旅のことを言った

「おもしろそうじゃない、行ってきたさい！」

ただし、ミソラちゃんに一言、声かけときなさいよ！」

「……ミソラって……」

『昨日いたオンナだよ』

ウォーロックがフォローした

「ミソラちゃんのこと……覚えてないの？」

「うん、誰のことかもまったく……」

「……そう……。」

~~~~~  
再びスバルの部屋~~~~~

プルップルッ……

「あつ、スバルくんじゃない、どうしたの？」

「いや、母さんが電話かけとけて言うから……」

「……そう……」

やっぱり、私のことは……覚えてないの？」

「うん……」

「……なんか……」

「……………!?……………い、いいよ

悪いのは…………スバルくんじゃ…………ない…………もん…………」

「……………」

「……………めん…………ね…………」

…………かけ…………て…………きてくれたのに……………切るね……………」

プツン、ツーツーツ……………」

あらたなる危機？

「……ウォーロック」

『なんだ？』

「……ぼく……なにか……悪いことしたのかな」

『悪いこと？……なにをだ』

「……やっぱいいや。」

『……』


~~~~ミシシギ~~~~

『・・・・・・・・・・』

「わああ~~~~ん・・・・・・・・」

《・・・・・・・・ミシラ・・・・・・・・》

「~~~~~~~~ハープう」

『なごっ』

「す．．．スバルくん．．．．．わ．．．たし．．．と．．．の．  
．．．おも．．．い．．．で．．．．．ううう．．．．．」

『．．．．．ミソラ、そんな無理しないでいいのよ．．．』

「だ．．．．．だっ．．．．．て．．．．．」

『大丈夫よ、スバルくんはちゃんと覚えてるわよ』

「．．．．．う．．．．．う．．．．．ううう．．．．．」

『．．．．．とにかく今日は休みなさい．．．．．』

「．．．．．う．．．．．う．．．．．うわあ~~~~~ん」

《……今日はこのままでおやすみ……》

~~~~~とある電脳世界~~~~~

『……………うは……………そうか……………』

……………ロックマン……………ギル……………

『

~~~~~星河家~~~~~

時刻PM9時

「・・・・・・・・」

『スバル、どうしたんだ？』

「・・・何にもないよ」

・・・

「・・・おやすみ・・・」

~~~~~スバルの夢の中~~~~~

．．．．．たすけて．．．．．

「えっ、君は、だれ？」

．．．．．ぼくは．．．．．ロックマン．．．．．

「．．．．．ロックマン．．．．．もしかして200年前の」

．．．．．そう．．．．．

・
・
・
・
・
・
・
フ
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「
え？
」

・
・
・
・
・
・
・
・
も
う
す
ぐ
で
・
・
・
・
・
・
・
・
テ
が
・
・

「待って、待って、まだ・・・」

バツ・・・

・・・ハナシが・・・」

『え、ハナシが？』

「……いや、なにもないよ……」

『……なんかあったんだろ……言えよ』

「………ちょっと、いきたいところがあるんだ……」

『………いいぜ、付き合ってやる……』

時刻は夜中の1時を回っていた……

海底

「……………ここだ！！！！」

『ここって……………海じゃねえか』

展望台の先に広がる海……………

「ウォーロック、電波変換だ！！！！！」

……………誰かがここで、ぼくを呼んでいる……………」

『……………理由はわからねえが

……………おもしろそうだ、いくぜ！！！！』

「電波変換、星河スバル、オン・エア」

『いくぜ』

「海の中へ!!--!」

シューーーン・・・・・・・・

・・・・・・・・

『ミソラ、もう泣き止んだら?』

「うっっ……」

『外の空気を吸ったら、なにか変わるかなって思ったけど……』

~~~~~海の中~~~~~

「こ、これだ!!!」

『・・・・・・』

海底のさらに奥へと続く深い穴

「・・・・・・行こう」

・・・・・・

『ミソラ、ほらっ、流れ星よ!』

「……………うっっ……………」

《……………駄目みたいね……………》

スバルとウォーロックは、底の見えない穴を進んでいた

．．．．．そのときだった！！！！

『．．．おい．．．スバル．．．』

「なに」

『．．．この海底には、とてつもない怪物がいそうだ．．．』

「えっ？どっいっしょと？」

『つまりだ．．．．．俺達は．．．』

やってはいけないことをしようとしている………』

「……いや、とにかくすすもう……」

このさきで、誰かがぼくをまっている気がするんだ………」

シューーーッ

二人はさらに奥へともぐっていった………



ハコ

~~~~~海底~~~~~

「……行き止まりだ……」

『……行き止まりじゃねえ……そのハコだ!』

ハコは手のひらサイズで、表面に赤と青のランプが点滅していて、見た目はたいしたことはないように見えるが、そのハコの中にはおぞましいチカラがはつきりと感じられた……

「うーん、どうすればいいかなあ」

『……まあ、触らぬ神に祟りなし、だ』

気にはなるが、これはそつとおいたほづがいい』

「・・・わかった、じゃあ戻るね」

~~~~~ハコの中~~~~~

『・・・・・・・・チカラが・・・・・・・・遠ざかっていく・・・・・・・・』

『・・・・・・・・テ・・・・・・・・目覚めた・・・・・・・・か・・・・・・・・』

~~~~~星河宅・朝~~~~~

・スバル「今日はルナちゃん達と行くんでしょ」

チコクするわよ」

「……ハイ……」

「……いつてきまーす」

~~~~~ウェーブライナー・駅~~~~~

『今日も早くついたな』

「・・・まあね」

・・・スバルくん!!!!!!

「えっとー・・・」

「ミソラよ、ミソラ!」

「・・・なんで来たの？」

「スバルくんが、私のこと覚えてないから

これから、思い出作りにーって・・・」

「そうなんだ・・・じゃあ、よろしくね」

「・・・ハープ・・・いたい何を考えてやがる・・・」

「あーら、私はただ、スバルくんがミソラを忘れてるなら

もういちど覚えてもらえばいいじゃないーって言うただけよ」

「・・・・・・フン」



## ハコ（後書き）

字数が少なくなっていました・・・すみません

アクセス数1万突破しました、ありがとうございます。  
これからもよろしく願います。



ワンサカシティ

~~~~~ウェーブライナー・中~~~~~

「・・・へえ、そういうことがあったのね・・・」

ミソラ、ハーブは、スバルに何が起こったのか、FM星のことを話した

委員長とキザマロは納得したが・・・

「・・・?????????」

ゴン太には理解できなかった

~~~~~1時間後~~~~~

「着いたわよ!」

着いたのはワンサカシティ、西二ホナーの人口を誇る

「さて、まずは……………ワシモト新喜劇みにいくわよ!」

委員長の誘導で一同はユメダ日月に着いた……………そして……………

「……………なんでやね……………ん!!!!」

ハハハハ・・・

「あゝ楽しかった、どうだった、スバルくん」

「うん、おもしろかったよ・・・」

スバルはだいぶ、ミソラにココロを開けるようになった

「じゃあ、つぎは・・・」

「いいinchょう！おれ、ハラ減ってしにそうだ！！！」

・  
「ゴン太は食べることはかりね、まあ、いいわ、もう12時だし・

粉もんでも食べに行きましょう!」

「・・・・??.??.?」

「ほら、ゴン太くん、粉もんっていうのは、

たこ焼きとかお好み焼きのことですよ!」

「・・・・あ・・ああ、じゃあ、フンもんでもいくか!」

「こ・・な・・もんですよ!?!?!?!」

・・・・ハハハッ

「なかなかおいしいわ」（ルナ）

「・・・バクバク・・・」（ゴン太）

「あ、これ、いける」（スバル）

「ふふふ、やはり思っていた以上のおいしさですね」（キザマロ）

「・・・もぐもぐ・・・おかわり!?!」（ミンラ）

「は、はええ・・・負けるか、うおおお・・・」（ゴン太）

「フーッ、もうおなかいっぱい、勘定お願いします」（ルナ）

「・・・・・・・・32000ゼニーになります」

「・・・・・・・・だ、だれ！？こんなに食べたのは!？」

「・・・・・・・・」（ミソラ・ゴン太）

その後もいろいろ歩き回り・・・

すでにあたりは暗くなっていた

「じゃあ、宿にいきましょうか」

・・・

「・・・・・・・・」

「！？えっ、こいつて！？・・・球場？」

「そうよ、今日はここで寝るのよ」

「寝るって、どこに」

スバルが必死に食い下がる

「・・・ついてきなさい」

・・・すげー――――



「このワンサカドームは、冬休みにグラウンドをキャンプ場として

開放しているの。いいでしょ！」

「……でもいいんちゃう、このまま寝たらカゼ引くぜ」

「ゴン太、ちょっとは考えなさいよ、これを使えばいいでしょ！」

「……マテリアライズ、テント……」

「……さすが、委員長！」

「ゴン太くん、ちょっと考えたらわかりますよ！」

「じゃあ、ミソラちゃんと私は赤いテント、

星河くん、ゴン太、キザマロは青いテントね！」

・・・はい

「明日は早いから、早く寝るのよー」

ワンサカシティ（後書き）

地名、わかりましたか？

## カンベシティ 前編

~~~~~アマケン~~~~~

「あ、天地さん!」

「どうした、宇田海?」

「また・・・コダマタウン展望台沖のエネルギー反応が強くなっています!」

「・・・原因はわかるか?」

「いえ・・・ただ・・・」

「・・・ただ・・・」

「・・・このエネルギーはどうやら、電波物質でない・・・」

「・・・スキャン結果が示しています・・・」

「とにかく、WAXAに連絡しよう

メールに添付するから、データを圧縮しておいてくれ！」

~~~~~ワンサカドーム~~~~~

「今日は……カンベシティにいくわよ

では、じゅっぱー……っ……」

~~~~~1時間後~~~~~

「……委員長、じゅっ……」(ミッラ)

「じゅはニノミヤタウン、そしてこれは「ウゴホン球場よ」」

「さっき、カンベシティに行くって……」(ゴン太)

「あくまでよ・て・い・を言っただけよ！」

予定は未定。……それで、ここを本拠地とする球団は、どこ？
」

「それは、板神タイターズですね

たしか最近10年間、ずっと世界ランキング1位の優秀な球団で……」(キザマロ)

「そうよ、キザマロ、そして……今日はタイターズの……

……ファン感謝祭なのよ

それで、あなた達には、ワタシのために……

・・・サインボールをとってほしいのよ」

「サインボール？」（スバル）

「そうよ、この感謝祭のメインイベントよ、

みんな……任せたわ!!」

……

ぴゅーっ

あっ、スバル、そっちいたぞ

手をのばしたら……バシッ……よし……
・ポロッ

「もぉ~~~~っ、星河くん、よくもやってくれたわね・・・」

「わぁぁぁー~~~~っ、助けてえ~~~~」

スバルはルナに追いかけて回されていた・・・

ぐるぐるぐる・・・

PM 4時・・・カンベシティ~~~~~（感謝祭は6時間ありました）

「・・・よし、じゃあこれから自由に行動していいわよ！」

スバルたちは、ナンベンマチ、中華街にきていた

「PM 6時にこのでかい六角の屋根前に集合ね、おくれ・・・」

「よっしゃあ、行ってくるぜ!!!」
（ゴン太）

バビューン・・・・

「ああっ、キザマロ、ゴン太についていくわよ！」

「ゴン太くんを一人にさせたら、どうなるかわからないですもんね」(キザマロ)

タツタツタツ・・・

「・・・あゝあ、みんないっちゃったね・・・」(ミソラ)

プルッ、プルッ・・・

「スバルくん!!」

「・・・天地さん??」

カンベシティ 後編

「じつはね、海底から、あるハコが見つかった」

「・・・・・・・・・・」

（もしかして、昨日の・・・）

「でね、僕と大吾さんとヨイリー博士でそのハコ・・・

いや、プログラムを調査した・・・・・・・・そしてその正体が判明した」

・・・・・・・・ゴクリ・・・・・・・・

「……昔、無法者たちの住処として知られていた……」

「……ウインターネットのフリーズデータだった……」

「……！？……なんで、僕に……電話を？」

「ハコが置かれていた周囲のデータを解析したら、

ウォーロックの電波反応がでたから、なにか関係があるのかと……」

「……もしかして、スバルくんはもう見つけてたのになって思
って」

「……………」

『オレがひまだったから、テキトーにダイビングしてたのさ』

「そうなのかい？スバルくん？」

「……………はい」

「ははは、そうだったのか、こちらの思い違いだったのか」

「……………」

「じゃあ、協力ありがとう。」

「失礼します」

・・・プツン・・・

「ウォーロック、なんで・・・」

『オレはさっさと中華街を楽しみてーんだよ』

・・・ホラ、あのオンナがまってるぜ』

「うん」

（ウライインターネット・・・・・・・・・・）

「スバルくん、早く行くよ〜」

「・・・うん・・・」

~~~~~中華街散策が終わり~~~~~

「よし、次はレミルミエにいくわよ!」

「レ・・・?」

「ゴン太くん、レミルミエは光のイリユージョンのことです・・・」

2000年以上前の大地震の教訓を後世の人々に伝えていくことが  
ていつ

モニメントですよ」

「イ、・・・・・・・・・・モニ・・・・・・・・・・?」

ぶじゅっつっつっつ・・・・・・・・・・

「もう、ゴン太はほつといて、先行きましょうっつ」

「そうですね、委員長」（キザマロ）

}}}}}}  
WAXA}}}}}}

.....プツン.....

「まもるちゃん、スバルちゃんには伝えた？」

「はい.....」

「このフリーズデータをといたら、なにが出てくるかわからないもの

できればこのままにしておきたいんだけど、このプログラムの  
なかが

どうなっているか、科学者として、知っておきたいからね」

「ヨイリー博士、準備ができました・・・」

「ありがとう、大吾ちゃん。じゃあ、いよいよはじめましょ・・・」  
「・・・」

ウィーーン……………解凍率10パーセント……………

……………20……………30……………50パ  
ーセント……………

……………70パーセント……………ゴリゴリッ……………  
……………  
……………

「な、なんだ!?!」(天地)

「……やはり、いけなかったのでは、博士」（大吾）

……80パーセン……90……

……完了……

「……ふう、なんとか……」



・  
・  
・  
・  
・  
人間どもよ  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
糧になれ  
・  
・  
・  
・  
・

ス  
ウ  
ウ  
ウ  
――――

「な、なんだ、  
・  
・  
・  
・  
」  
（天地）



## 黒い影

~~~~レミルミエ~~~~

「ついたわよ!」

うわあ~~~~

上下左右が光に囲まれた空間……

そのなかからあふれんとするような人ごみ

200年以上まえ、この地におきた悲劇を語り継ぐと

いまもモニュメントの光は変わることなく人々を照らし続ける

「人ごみがすごいから、万が一はぐれても大丈夫なように

今日とまる予定のホテルの地図をおくったわ

ちゃんと帰ってくるのよ、特にゴン太!」

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

「じゃあ、行きましょ」

そして、5人は人ごみの中に入っていった・・・・

「すごいなあ・・・・・・・・」

スバルはすっかり光にみとれていた………

「う、うわああー……」

『どうしたんだ、スバル』

「だれかに、腕を引っ張られてる……」

〕〕〕〕〕
WAXA〕〕〕〕〕

一瞬で廃墟と化したWAXA内部……

「……………俺達が、また動けたということは……………」

『炎山さま、やつの封印が解かれています!』

「……………やはりな……………」

光のやつは・・・どこかわかるか・・・ブルース」

『いえ・・・わかりません』

・・・いや、光なら、やつを追いかけていった・・・

「・・・ライカ!!」

「・・・まずは俺達の周りの情報を集めよう・・・」

「・・・わかった・・・」

~~~~~キャンベシティ・展望台~~~~~

「まさか、君だとはおもわなかったよ・・・」

「ミソラね。名前、はやく覚えてよね！」

「じゅめん・・・」



『・・・・・・・・ミソラ、いまよ・・・・・・・・』（ハーブ）

（うん、うん）

「・・・・・・・・スバルくん、お願いがあるの」

「なに？」

「この、南京錠に・・・・・・・・私の名前を・・・・・・・・書いてほしいの」

「・・・・・・・・なんで？」

「・・・・・・・・これにお互いの名前を書きあって、

あそこにある木にはめると・・・」

「・・・はめると・・・?」

暗くてみえないが、ミソラの顔は赤くなっている

『がんばって、ミソラ!』

「かけると・・・ふ」

スバル~~~~~

「なに、ウォーロック？」

『なにか………近づいてくる………』

「えっ!？」

キャーーーーーッ!! わあああああっ!!!!

バーン……ドゴーン……

「レミルミエが………あの黒い影は………」

『スバル、電波変換だ、はやく止めに行くぜ!!』

「わかった!!!!」

電波変換、星河スバル、オン・エア!!」

パシューーン……

『ミソラ、言えなかったわね……』

『……ハープ、行くわよ』

『……スバルくんの手助けね……わかったわ！！！』

「電波変換、響ミソラ、オン・エア!!」

パシューン……

大切な人

~~~~レミルミエ上空~~~~

バーン・・・ドゴーン・・・

「やめるんだ!?!」

スバルは叫んだ

『なんだ、キサマは・・・』

「ぼくはロックマン!?!破壊をやめろ!?!」

『ロックマン?・・・ばかな・・・』

．．．オレには．．．チカラがたりない．．．

．．．．．ゲットアビリティプログラム!!!!!!
』

スウウウー————

「く、カラダが、吸い込まれる．．．」

「
・
・
・
・
・
・
・
」

「
うわあああああああっ！！だ、ダメだっ！！！！」
」

・・・ショックノート!!!!!!!!!!・・・

「うわっ!!--!」

スバルは巨大な音符によって、なんとか危機を脱することができた、だが

「・・・・・・・・きゃあーーーーっ!!!!!!!!!!」

ハープ・ノートが吸い込まれていく・・・

「
.
.
.
.
.
.
ハッ
.
.
.
.

〕
〕
〕
〕
〕
〕
〕
〕

「
.
.
.
誰かに伝えないといけないこと
.
.
.
.
.
.
.

なにか
.
.
.
.
.
大切なことを忘れてる
.
.
.
.
.
.

『ちゃんと、自分の想いを伝えないと、』

ミソラは二度と振り向いてくれないかもしれないよ『』

「・・・・・・・・ミソラ・・・・・・・・?」

「・・・・・・・・ミ・・・・・・・・ソラ・・・・・・・・ちゃ・・・・・・・・」

バタッ・・・・・・・・

「す、スバルくん!!大丈夫???」

なんでぼくの名前を……………

「……ほん……とう……に……」

……わ……たし……の……「と……」

……おぼ……え……て……ない……の？」

……

.....

~~~~~

~~~~~

.....覚えてるぞ」

『どうした、スバル』

「ミソラちゃん!!」

「.....」

「いま助けに！...いくよ、ウォーロック！...！」

『おっ！』

バトルカード、ソード！

「ミソラちゃんを・・・返せえ！！！！」

まだ、ハーブ・ノートは吸収されていなかった

『・・・・・・・・邪魔だ！！！！・・・消えろ！！！！』

アースブレイカー！！！！！！

『・・・くらえ!』

・
シューーーーーン・・・
ドーーーーン・・・
・

もう一人の・・・

シューウウウ・・・

ハープ・ノートは吸収されてしまった・・・

「つつ、って、あれ？」

『大丈夫か？』

「ロ、ロックマン？」

『よくがんばった、あとは任せてくれ・・・』

「は、はい・・・」

スバルは下に降りていき、上を見上げていた・・・

『お、おい、スバル、なにが起こったんだ』

「ぼくにもわかんないや・・・」

『・・・フォルテ!!!!!!!!!!』

『・・・追ってきたか、光熱斗・・・なんのようだ・・・』

『決まってるだろ！お前を倒しにきた！！』

バトルチップ！パラディンソード、スロットイン！

『おもしろい……ダークアームブレード！』

フォルテの腕が黒紫色のソード状に変化した

カンカンカンッ……………

チカラはほぼ互角のようだ……

『これならどうだ！』

バトルチップ、ソード、ワイドソード、ロングソード

そして光を帯びながら変化し……

プログラムアドバンス！ドリームソード！

カーン……バキッ！

『くっ、まだチカラが……足りん……』

『とどめだ……』

ロックマンがソードで切りかかろうとしたそのとき

『……勝負はお預けだ……ロックマン』

シュン
・
・
・
・
・
・
・

☐
・
・
・
・
消えた
・
・
・
・
・
☐

「・・・・・・・・・・助けていただきありがとうございます」

「いや、いいよ全然」

あのさ・・・・・・・・聞きたいんだけど・・・

今って、西暦何年？」

「22XX年ですけど・・・」

「えっ、ロック、聞いたか？」

『う、うん・・・・・・・・もう200年も経ったんだね』

「に……ひく……は……200!？」

ええ~~~~っ、200年もたったのか~~~~!!~」

『熱斗くん……気づくの遅すぎ……』

かつての英雄達

ひかり~~~~~

タッタッタツ・・・

「おい、フォルテはどこへ・・・」(炎山)

「・・・逃げられた・・・」

「そうか・・・」

「あの、聞きたいことがあるんですけど・・・」

スバルが尋ねた・・・

「さっきいたフォルテって、もしかして・・・」

「そう、やつはかつて、電腦世界を滅ぼしかけた・・・」

「・・・というか、こいつは・・・だれだ。」（炎山）

「星河スバルです、さっきロックマンさんにたすけていただいた」

「おれは、光熱斗。よろしく、スバル！」

「・・・・・・・・伊集院炎山だ・・・・・・・・」

『炎山さまのナビ、ブルースです』

「おれは、ライカ・・・・・・・・」

『・・・・・・・・サーチマン・・・・・・・・』

（うわあ、歴史上の人物が、ぼくの目の前に・・・・・・・・）

「・・・・・・・・でさ、スバル、どうしてこいつがロックマンってわかったんだ？」

「・・・・・・・・歴史の時間にならったの・・・・・・・・」

あと、ぼくがこの時代のロックマンだからです」

「へー、スバルってすごいんだなあ

じゃあ、フォルテのことも知ってるのか？」

「はい、電腦の破壊神ってなりました」

「……そうか。」

「あの、どうして、熱斗さん達がこの時代に……？」

「よし、じゃあロックマン、教えてやってくれ！」

『もー熱斗くん……もう30歳でしょ、自分で話しなよ

そもそも熱斗くんには……』

「わかった、ごめんごめん、自分で話すからさ。説教だけは・・・」

『・・・』

「よし、じゃあ話すぜ！・・・」

かつての英雄達（後書き）

タイムアウトです

過去

~~~~~約200年前~~~~~

電腦獣の消滅から、18年・・・

誰もが平和になった・・・・・・と確信していた・・・・

しかし、かつてウインターネットの最深部に眠っていたフォル  
テが

目を覚まし、オモテの世界にでて攻撃を開始した・・・・

俺達3人はフォルテを止めるべく、戦ったが・・・・

・・・・・・まったく歯が立たなかった・・・



まさに世界中がフォルテの脅威にさらされていた

だが、おれは昔、セレナードというウラの王からもらっていたプログラム……

……ギガフリーズをもっていた……

これを使えば、フォルテを倒せなくても地球が救われる……

しかし、仮に何年かしてフリーズがとけてしまったとき、

フォルテを止めることができるのだろうか……

そこで俺は2人と協力し、俺達自身をフリーズしてしまうことで

何年か先、フォルテのフリーズがとけても暴走を阻止する……

そのときに備え、パルストランスミッションによってナビと意識をひとつにし

ウライインターネットにフォルテが入ったところで………

……エリア全体をフリーズさせた………

そのあとは科学省によってフリーズしたエリアごと圧縮し

どこかに隠すという計画だった

~~~~~

「こんな感じなんだけど・・・わかったかな」

「はい・・・」

「・・・で、フォルテを追いかけないといけないんだけど・・・」
「

「・・・どうする・・・」

・・・

「それなら、WAXAにいけば．．．なにかわかるかもしれな
い」

「ほ、ほんとうなのか、スバル」

「はい、あそこならいい科学者たちが．．．．．」

「残念ながら、そのセンは捨てたほうがいい．．．．．」

「．．．．．なぜだ．．．ライカ．．．」（炎山）

「あそこ人間は．．．．．全てフォルテに吸収された．．．．．」

「ま、まさか・・・・・・・・ミソラちゃんだけじゃなくて

・・・・・・・・父さんまでも・・・・・・・・フォルテに・・・・」

・・・・・・・・・・どつすねば・・・・・・・・・・）

アマケン

「ミソラちゃんだけじゃなくて、父さんまでも……」

『スバル、気持ちはわかるが今はそんなくよくよしてる場合じゃねえぜ』

まずはあのフォルテを倒すほうほうを考えねえと、

地球が破壊されちゃう！』

「……わかったよ、ウォーロック……」

「なあ、スバル。ほかに研究施設の整った場所はないか？」（熱

斗
)

「それなら・・・・・・・・アマケンが・・・・・・・・」

「どこにあるんだ?」

「ウェーブライナーで行けば・・・・・・・・」

「・・・・・・・・案内するんで付いてきてください」

「よし、わかった!じゃあ行くぞ、炎山、ライカ!」(熱斗)

《おい、スバル、電波変換で行ったほうがはやくねえか》

（この人たちは電波体じゃなくてナビだから、ウェーブロードは使えないよ）

《・・・・・・・・そうなのか？》


~~~~~ウェーブライナー・カンベシティ駅~~~~~

・・・ダメだ・・・

ウェーブライナーはフォルテの影響で機能が麻痺していた

「くっそー、どうすれば!?!」(熱斗)

ーーーープルルッ、プルルッーーーー

スバルのハンターV Gだ

「はい、スバルです」

「もしもし、スバルくんですね？」

「宇田海さん！」

「急いでアマケンに来てくれませんか」

「それが、ウェーブライナーが通ってなくて……」

「そうですか、では今からアマケンとスバルくんのいる所に

ショートカットキーを作るのでちょっと待っていてもらえませんか」

「はい、でもなぜ、ぼくに電話を………」

「………ヨイリー博士、天地さん、大吾さんがいなくなりました」

（……天地さんまでも！！）

「私がさっきWAXAに原因を調べに行くと、内部に

WAXAを襲ったものと見られるプログラムデータが落ちていました……

そして、そのデータを使い、WAXAを襲った謎の物体の位置を特定する

ハンターV G用の機能を開発しました。

なので、それをスバルくんのハンターV Gにインストールしようと

連絡を入れたわけです」

「つまり、それがあれば、謎の物体を追いかけるんですね」

「・・・そのとおりです・・・」

では、ショートカットキーをつくるんで、スバルくん

「まっていってくだい」

・・・プン・・・

~~~~~20分後~~~~~

ピーーン…………

「ありがとうございます、宇田海さん」

「…………スバルくん、あの方達は…………」

「…………このハネは…………」(炎山)

「すごいな…………こんなに進歩しているとは…………」(ライカ)

カチャカチャカチャ・・・・・・・・

「何しているんですか、熱斗さん」(スバル)

「いま・・・・・・・・P E Tをつくってるんだ・・・

このまま、ロックマンと合体していても不便なことがあるだろうし・・・」

「それなら、このハンターV Gをつかってください」(宇田海)

「え、いいんですか？」

「いいですよ、それを使って・・・」

「あ、ありがとうございますっ！！」

・
・
そういつと、熱斗たちはパルストランスミッションをといたが・

「・・・・・・・・俺達は、データ化しているんだっとな・・・・・・・・」
（炎山）

「スバルくん、コピーロイドはある？」（熱斗）

「いえ、もう今はないです……」

「こまったな……このままじゃハンターV Gを持ってないや」
（熱斗）

「大丈夫ですよ、これを……」

そういつて宇田海が出したものは……

．．．．．ゴクリ．．．

一同は息をのむ．．．

「この装置は、マテリアライズ機能を応用して作った、

どんな物質でも物体化してしまう装置．．．．名前はないですが」

「じゃあ、それを使えば．．．」（熱斗）

「データ化してしまったあなた達でも物質化できます」(宇田海)

「・・・・・・・・使うぞ・・・」(炎山)

トランスコード(前書き)

50話目突破して、PV15000突破、これからもよろしくお
願いします！

トランスコード

シューウウウウ・・・

「よしー!」(熱斗)

「・・・・・・・・200年後にこんな技術が・・・・・・・・」(炎山)

「・・・・・・・・感謝する・・・」(ライカ)

3人は無事、実体化成功した

「宇田海さん、質問が・・・」(スバル)

「なんですか・・・」

「フォルテに吸収された人たちは、どうなったんですか？」

「それは・・・わかりません・・・」

『スバル、お前は鈍感だな！』（ウォーロック）

「どうして？」（スバル）

『俺は感じるぜ、ハーブ・ノートの電波反応をよ

あの女のブラザーも消えてねえだろ？』

「……ホントだ……」

『たぶんやつは、一見吸収したやつらを力に変えているようにみえるが

実際はただ、体にためてるだけのホラ吹き野郎だ』

「・・・いや、違うな・・・」(炎山)

『なんだ、オレさまに・・・』

「ふん、血の氣の多いやつだ

・・・いいか、やつは力に変えられないのではなくて、

・・・変えていないんだ

・・・弱いやつはわざわざ力にしても意味がない、そついうことだ・

まあ、目覚めたばかりで吸収したものを変える力がないだけかもしれないがな・・・」

『・・・ケツ・・・』

(・・・ウォーロックが黙るなんて・・・)

やっぱりこの人たちは……すごい！

「やつが狙うのは、力に変える価値のある、巨大なエネルギーだ

……スバル、ハンターV Gをしてみる……」(炎山)

カチャツ……

スバルはハンターV Gを見た

「え……反応が……消えた」

「いや、消えることはありませんよ

たぶん、この地球の外、宇宙とかに……」(宇田海)

「……スバル、サテライトだ!!!」

そこから大きな反応を感じる!!!」

「サテライト！？やられたら……危ない！」

「…………サテライトとは何だ？」（炎山）

「もぉーーーーっ！今はそんなの気にしてる場合じゃないぜ！

早くいこうぜ！スバル！」（熱斗）

「…………だが…………」（炎山）

「炎山さん、向かう途中におしえますんで、行きましょう!」
(スバル)

「しかし、どうやってナビとシンクロするんだ」(ライカ)

「ああ、そうです、『トランスコード、』と叫べば……」

それから、スバルくんもサテライトシステムの整備が終わったので

トランスコードを叫べば電波変換ができます……」(宇田海)

「ありがとう、宇田海さん」(スバル)

「……電波変換とは何だ？」(炎山)

「もぉ~~~~~~~~~~~~つ、
× !!!!!!!!!!!!!!!」

『熱斗くん……言葉になってないよ……』(ロックマン)

「とにかく、行きましょう!」（スバル）

よし

トランスコード

ロックマンエグゼ!!!

ブルース!!!

サーチマン!!!

トランスコード003

シューティングスター・ロックマン

!!!

「行くぞ……！」
(熱斗)

おおっ……！

シュッ……

「頼みましたよ……」(宇田海)

「スバルのトランスコード、かっこいいな！」(熱斗)

「…………ま…………まあ…………」(スバル)

「そんなことより、サテ……………」(炎山)

「いいんだよ!!!!!!」
「x!!!!!!」(熱斗)

『熱斗くん、言葉が……………なっていない……………』
ロククマン()

（こんなときでも熱斗さん達はリラックスしてる・・・）

・・・ぼくも見習わないと・・・）

『別に、見習わなくていいんだぜ』（ウォーロック）

「えっ!？」（スバル）

サテライト・ペガサス

「宇宙か………キレーだな………」（熱斗）

「ウォーロック、どのサテライトに反応がある？」（スバル）

『………ペガサスだ……』

「………しかし電波体とは便利だな………」（炎山）

「熱斗さん、コッチです！」（スバル）

「よし、行くうー!」（熱斗）

．．．．．そのころ・サテライト・ペガサス．．．．．

『．．．．．きさまから．．．．．チカラを感じる．．．．．』
（フォルテ）

『何のようだ、ここは立ち入り禁止のはずだが』（ペガサス）

『．．．．．キサマのチカラを．．．．．いただく!?!』

．．．．．ヘルズローリング！！！！

黒い輪のようなものが2つ、勢いよくペガサスに向かっていく

『だれか知らんが、サテライトを壊そうというのなら．．．．．排除する』

．．．．．ペガサスフリーズ．．．

すると、フォルテの下から魔法陣が現れ．．．．．

『・・・・・・フン・・・・・・』

大きい氷柱が襲おうとしたが、フォルテはよけてしまう

しかし黒い輪は破壊できた

《・・・・・・システムが壊されてはかなわん・・・・・・》（ペガサス）

すると、ペガサスは宇宙に出た・・・・・・

『・・・・・・逃げさん』

そう言ってフォルテも宇宙に出た

ペガサス~~~~~

☐·····星河スバル·····☐（ペガサス）

☐·····油断したな·····☐（フォルテ）

·····シュン

フォルテはスバル達の前に現れ

・・・ダークネスオーバーロード!!!!

「しまった、油断した」(熱斗)

「・・・くっ、ここまでか・・・」(炎山)

『喰らえ!!!!』(フォルテ)

.....

「・・・・・・・・え？」
（熱斗）

「フ、フォルテが・・・・・・・・凍ってる」
（スバル）

『大丈夫か、星河スバル・・・』（ペガサス）

「そうか、このコオリは、きみが助けてくれたんだね、

ありがとう！」（スバル）

『・・・スバル、まだ喜ぶのは早そうだ・・・』（ウォーロック）

「・・・どうして、ウォーロック？」（スバル）

「……どうやら、そうらしいな……」(炎山)

「……ああ、やつはこの程度で終わるやつじゃない……」(ライカ)

「……どうして……さっき倒したハズじゃ……」(スバル)

「……ゲットアビリティプログラム……」

フォルテは完全に消さない限り、倒せない……………」(熱斗)

「…………えっ…………どういことですか……………」(スバル)

「…………生きていたら話してやる……………」(炎山)

…………バコーーーン…………

コオリの割れた音だ

「構えろ、くるぞ！」（ライカ）

パシューーーーーーン、ダークネスオーバーロード！！！！

『グハアアーーーーー』

フォルテはペガサスの後ろに回りこみ一瞬で技を打ち込んだ

バル

☞ 星河スバル

パ
ー
ー
ー
ー
ー
ン

「…………これは、スターフォースカード……………」
（スバル）

『……………ゲットアビリティプログラム！！！！』
『』

スウウウウー—————

……………ペガサスは吸収されてしまった……………

『…………スバル…………』（ウォーロック）

「うん……………これから本当の戦いだ、行こう」

スターフォースカード・セツト・イン！！！！

パーツ…………スバルをまばゆい光が包む…………

ロックマン・アイスペガサス!!!!!!

サテライト・ペガサス（後書き）

強者

「行くぞ、フォルテ!!!」（スバル）

『…………おもしろい…………』（フォルテ）

…………エアバースト！

黄色にかがやくエネルギー弾がフォルテの手から発射される

「くらえ！アイススラッシュ！」（スバル）

氷の玉が勢いよく繰り出される

．．．バーーン．．．

『．．．．．互角．．．．．なぜだ．．．』（フォルテ）

『互角じゃねえぜ、いったれ、スバル！！！』（ウォーロック）

うおおおおっ．．．マジシャンフリーズ！！！！

フォルテの下からあらわれた氷柱がフォルテにヒット．．．

「よし!!」(スバル)

「スバル!後ろだ!!」(熱斗)

「...所詮オマエは...弱者...」

・・・ダークアームブレード!!」(フォルテ)

・・・キンッ・・・

「え、炎山さん!」

「おれがもたない、早く体勢を立て直せ・・・」

『・・・まずは・・・オマエからデリートしてやろう・・・』

『

ギガキャンノン!!!

バン!!!!・・・フォルテに命中した

「くっ、プログラムアドバンスでもこの程度か・・・」
（ライカ）

「・・・・・・・・人間のブンザイで・・・・・・・・・・・・・・・・」

きさたまらまとしてデリートしてやる!!!!」
（フォルテ）

ブーーーーン……………

……………くええ!アースブレ……………

…レオブレイザー!!!

すさまじいまでの火炎がどこから現れた……………

『……………ダレだ……………キサマら……………』(フォルテ)

『わが名は、レオ・キングダム』

『わが名は、ドラゴン・スカイ』

『・・・しかたない・・・」」は・・・ひくか・・・』
(フォルテ)

バツ・・・

「くっ、逃げられた・・・」(スバル)

「ありがとう、人間達よ・・・」(レオ)

「いえ、それが、ペガサス・マジックが・・・」(スバル)

「わかつている・・・フォルテとかいったな

いまの、あなた方には、やつは倒せまい』(ドラゴン)

「……じゃあ、どうやって……」(スバル)

『……強い絆のチカラ……』

ブラザーバンドであれば、あなた方のチカラは無限に高まる』
(レオ)

「……ブラザーバンド……?」(炎山)

『そうだ……』

いまの我々には、これしかわからない……

だが、絆を一つにして戦えばフォルテは倒せるかもしれない
(レオ)

「絆を……一つに……」 (スバル)

『すまないが、ペガサス・マジックがいなくなったことで

我々の仕事が増えてしまった……

では、失礼する……』(ドラゴン)

パシューーン……

(絆を一つにして……チカラを……)

・・・宇田海さんに聞いてみよう・・・

「ふぁぁぁぁ・・・眠くなっちゃった」(熱斗)

『・・・もう夜の1時だもんね』(ロックマン)

「フォルテはいなくなったが、またどこから現れるか・・・」
(炎山)

「まあ、気持ちはわかるけどさあ、寝ないと体力もたないぜ」
(熱斗)

「……たしかに熱斗の言うことにも一理ある……

……今日はどこかで休んで、体を回復させよう」
（ラ
イカ）

「……」
（炎山）

「スバル！なんか寝るのにいいところはないか？」
（熱斗）

「あ、じゃあぼくの家に来てください」

《スバル、もう夜の1時だぜ、おフクロになにいわれるか……》

（しかたないよ、ウォーロック、ちゃんと事情を説明すれば……）

《……おれは知らねえからな！》

「じゃあ、戻りましょう！」（スバル）

スバルたちは、地球へと帰っていった・・・

家族の絆

~~~~~星河家・玄関前~~~~~

「あれ、鍵がかかてる……」（スバル）

『おフクロに締め出しくらったんじゃあねえか？』

「……まあ、オレさまが直々に中から開けてやるよ……」  
（ウォーロック）

「……お願いします」（スバル）

「……ガチャッ」

「ありがとう、ウォーロック！」

『まあな』

「じゃあ、ゆっくり付いて来てください．．．ってあれ？いない」

『．．．もう部屋に行ってるみたいだぜ．．．電波変換で．．．』

「．．．．．部屋にいます」

トントントン．．．．．ガチャッ

「はあ、この部屋久しぶりに来たあ」（スバル）

この二日間、旅行に行っていたので久々に感じたのだろう

『バレないでよかったな!』

だが、炎山はあることに気づく・・・

「・・・スバル・・・本当にこの家に誰がいるのか?」

「・・・えっ?」（スバル）

「この家に、俺達以外の気配は感じられん……」(炎山)

「……まさか!？」(スバル)

スバルは、母のあかねが寝ていそうな場所を見て回ったが……

「ホントだ……母さんがいない……」

『スバル、オフクロに電話したらどうだ』

- - - ツー ツー -----

「つながらないや・・・」

『メールは』

「・・・届かない」

『・・・いつたいドコにいやがる・・・』



~~~~~そのころ・フォルテ・体のなか~~~~~

「・・・私達、死んじゃったのかな・・・」

『考えすぎよ、ミソラ！元気出して！』

とにかく、ここに他のひとがいないか探しましょ」

「・・・うん」

あたりは一面が暗闇に覆われ、歩いてても歩いてても変わらない風景

はたしてここに人がいるのか、ミソラは疑問に思っていた

「はあ、人なんてここにいるのかな」

『大丈夫よ、ちゃんと気配は感じてるから・・・』

・・・ミソラちゃん！こっちこっち！

「・・・この声は！！！」

ミソラはとにかく声のする方向へあるきだした

その先には・・・

「やあ、FM星以来だね」

「だ、大吾さん！」

「WAXAの職員はみな吸い込まれたんだよ

．．．．．電腦の破壊神、フォルテにね！」

「．．．．．フォ、フォルテ！！！！！」

200年前の伝説のナビが、なんで．．．．．」

「それは、ぼくらの責任だ

コダマタウン展望台沖の海底に、謎のハコ型データを見つけたんだ

その正体を暴こうと、フリーズをといた瞬間に・・・フォルテが・・・」

「そうだったんですか・・・」

「・・・とにかくここを脱出しないと・・・」

スバルが一人取り残されてしまう・・・」

「・・・スバルくんが一人って・・・」

「ああ、オレと一緒にWAXAに来ていたあかねも、吸収されてしまった

いまはそこにいるが……、

もし、このまま脱出できなければ、スバルを一人ぼっちにさせてしまう

そんなことは絶対にさせない……

スバルがいることは、オレとあかねの……生きる理由なんだ……

だから・・・・・・・・くっ」

暗くてよく見えないが、大吾の目には光るものがあつた・・・

（・・・わたしも・・・・・・・・スバルくんを一人ぼちなんで・・・

絶対に・・・・・・・・させたくない！！）

「大吾さん、私も手伝います!!」

「……ありがとう、じゃあハーブノートの音波を使って

この中にまだ取り残されている人がいないか、調べてきてくれ
」!

「はい、わかりました……いくよ、ハーブ!」

「あと、サテライトの整備が終わった関係で

トランスコードだけでも電波変換できるから!」

「ハイ」

トランスコード・ハーブ・ノート!!!

「いくわよ、ハーブ!」

『ええ、音波の調節は任せて!』

ショックノート!!!

新しいプラザーバンド

~~~~~星河宅・朝~~~~~

「よし」（スバル）

「フォルテはいま、暴れてないからな

スバル、昨日ライオンが言ってたこと、ちゃんと聞いてこいよ  
」（熱斗）

『熱斗くん、ライオンじゃないよ……』（ロックマン）

「じゃあ、行ってきます」（スバル）

ガチャン……

「……光……おかしくないか……」(炎山)

「えっ、なんでだ」

「なぜ、やつの居場所があのにプログラムに写らないか……」

サテライトにも反応がないのに……」(炎山)

「・・・フォルテは普段オーラをまとっている

それがやつのデータ反応をジャミングしているのでは・・・」  
(ライカ)

「・・・でも、あのプログラム以外にフォルテを探す方法はない  
ぜ」(熱斗)

「・・・なら、やつが狙いそうな場所に先回りするまでだ・・・」  
(炎山)

「それはどこだ？」(ライカ)



~~~~~30分後・アマケン~~~~~

「宇田海さん！」

「スバルくん・・・なにかありましたか」

「また質問がありまして・・・」

ブラザーバンドを通じて、スターフォース以上のチカラを

出すことは可能なんですか？」

「……………可能です……少しハナシは長くなりますが……」

・・・天地さんをはじめとする我々アマケン職員は

大吾さんのいない間、ブラザーバンド機能の強化に努めていました

そして、3ヶ月前、ついに完成したんです・・・

絆の強さをチカラに変換する・・・キズナ・フォース・シス

テムを」

「キズナ・フォース・システム？」

「はい、その新機能はブラザーを結んだ人とのキズナの強さに応じて

チカラを増幅させることができます・・・

さらにそのブラザーが特別なウィザード

- - - たとえばFM星人であったり、一般のウィザードとは違う特性を

持っているならば、そのチカラを借りて使うことができます

．．．それを、キズナクロス．．．」

『それを使うにはどうすりゃあいいんだ』

「．．．このKFSプログラムを使えば．．．

しかし、まだこのプログラムは不完全で．．．．．

キズナ・フォース・システムを発動させてから終了させるまでの間に

・
ブラザーのなかに一人でもキズナを信じないものが現れれば・

システムを使っている本人はフリーズ状態に陥り

・
・
・
・
・
・
二度と生きて帰ってこれなくなります」

・
・
・
・
・
・

「大丈夫ですよ、宇田海さん！」

「・・・・・・・・えっ・・・・・・・・」

「ぼくのブラザーにキズナを信じない人はいません

大丈夫です、必ず・・・・・・・・生きて帰ってきますから」

「スバルくん・・・・・・・・わかりました

では、このKFSプログラムを・・・・・・・・」

宇田海はウォーロックにインストールし、

「あと、キズナクロスを発動させるには、このカードをつかって
ください」

「これは・・・」

「クロスカードです、これを使えばキズナクロスを発動できます

しかし、ダレとクロスできるかはわかりません・・・」

「はい、ありがとうございます」

「頼みましたよ、スバルくん……」

「任せてください」

フォルテを………絶対に倒します！」

『たまにはいいこと言うじゃねえか、スバル』

プルルッ、プルルッ………

『スバル！オート電話だ！』

ガチャッ・・・

「スバル！サテライト・レオにフォルテが現れた」

「わかりました、熱斗さん、すぐ向かいます！……！」

「いくよ、ウォーロック！」

『任せろ！……！』

トランスコード！シューティングスター・ロックマン！……！

決戦！フォルテvsレオ・キングダム 前編

~~~~熱斗たちが家を出て5分後~~~~

「・・・・電波だと速いな」（ライカ）

熱斗たちはもう宇宙空間の中にいた・・・

「いま、宇宙にはまだ襲われていない2つのサテライトがある

そこでだ、これからは二手に分かれて行動する・・・

光、ライカはサテライト・レオ、オレはサテライト・ドラゴン  
に行く

フォルテが現れたら、ハンターV GのHELPシグナルを使って

互いに知らせるんだ……いいか」(炎山)

「ああっ、わかったぜ!」(熱斗)

- - - パシュンーーーーー

3人はそれぞれの持ち場へ移動した……

~~~~~サテライト・ドラゴン~~~~~

「ブルース、何か感じるか」

「いえ、今はなにも……」

「そうか・・・では待つとするか・・・」

・・・おまえがフォルテか・・・

パシユン・・・

炎山の前に現れたのは・・・

「おれは、アシッド・エース、おまえを倒しに来た！」

・・・ロックオンソード！

炎山の体のまえにカーソルが現れ、アシッド・エースが迫ってくる

「くっ・・・」

炎山はギリギリの所でかわしたが、アシッド・エースの攻撃は終わらない

・・・ウイングブレード!!!

アシッドエースがハネを広げて突進してくる

(・・・仕方ない・・・)(炎山)

アシッド・エースが炎山の間合いに入ってきたときだった

バトルチップ！イアイフォーム！！

炎山の剣がアシッド・エースを斬る・・・

「くっ、強い……」(暁)

ダメージが大きかったのか、アシッド・エースの電波変換は解けてしまった

「言っておくが、おれはフォルテではない……」(炎山)

『シドウ……どうやら違っていたらしい……』(アシッド)

「・・・・・・・・わかったな・・」(暁)

「お前は・・・・・・・・だれだ」(炎山)

「元サテラポリス遊撃隊隊長、暁シドウ・・・・・・・・」(暁)

「サテラポリス!？」(炎山)

「ああ、おれはWAXA襲撃事件の犯人、フォルテを捜していた

サテライトに侵入者が現れたからきてみたが……きみは……」

「……伊集院炎山だ、おれもフォルテを追っている……」

「伊集院炎山！？なぜ、200年前の英雄が……ここに」

「ハナシはあとにしよう．．．．．どっからやっのお出ました．．」

『炎山さま、サテライト・レオからHELPシグナルが．．』
（ブルース）

「．．．．．よし．．．」（炎山）

パシュン．．．．．


~~~~~サテライト・ペガサス・・・ちよつとだけ前~~~~

「ロックマン、フォルテの気配は？」（熱斗）

『まだ感じられないよ。それより、炎山くんはだいじょうぶかな？』

「ははっ、まあ心配することないさ。どーせ大丈夫だよ」

「!!!!!!光・・・・くるぞ・・・・」（ライカ）

・・・またあらわれたか・・・おろかな人間どもよ・・・

「フォルテ！」（熱斗）

『・・・・・・・・・・いまのキサマに用はない・・・・・・・・・・』（フォルテ）

そう言つとフォルテは一瞬でレオ・キングダムの前に現れ・・・



『・・・キサマのチカラ・・・もらっぞ・・・』  
「

（HELPシグナルと・・・プルルップルッ・・・

スバル！サテライト・レオにフォルテが現れた！・・・プツン・・・  
・・・）





決戦！フォルテvsレオ・キングダム 前編（後書き）

効果音とバトルシーンがニガテです・・・

決戦！フォルテvsレオ・キングダム 後編（前書き）

タイトルと内容は必ずしも合っているとは限りません・・・矛盾しました、すみません

決戦！フォルテvsレオ・キングダム 後編

~~~~~サテライト・レオ~~~~~

『倒せるものなら倒してみよ』（レオ）

すると、レオの足下には巨大な魔法陣が現れ、氷柱がレオ・キングダムを氷づけにさせてしまった・・・

『トドメだ・・・』（フォルテ）

「させるか！」（熱斗）

「光……ソウルユニゾンだ！」（ライカ）

「おおっ！」（熱斗）

ソウルユニゾン！ロックマン・サーチソウル！

ロックマンの体は深緑を基調とした色になり、左手のロックバスターはサーチガンに変わっていた

スコープガン！！！

カーソルがフォルテにあった瞬間に、弾が発射された、しかし

『目障りだ……消えろ！！』（フォルテ）

命中したが、フォルテにはまったく効かず……

ブーーーーン・・・・・・・・・・アースブレイカー！

ドーーーーン・・・・・・・・

アースブレイカーはロックマンに直撃した

「・・・・・・・・あれ、効いてない・・・・・・・・」(熱斗)

「・・・・・・・・ひ・・・・・・・・か・・・・・・・・り・・・・・・・・」(ライカ)

「ラ、ライカ!」

「あとは……まかせたぞ……」

「おい、ライカ！ライカーーーー！！！！！」

・・・ライカは熱斗を攻撃から守るため、ソウルユニゾンを解除し自らを犠牲にした

そして、ライカはそのまま宇宙のチリと化し消えていった……

炎山の指をさした先には、レオ・キングダムをフォルテが吸収している光景があった

そして完全に、レオはフォルテのチカラの一部と化した・・・

「やつのチカラが・・・・・・どうする・・・」（炎山）

「・・・・もちろん戦うさ、やられたライカのためにも、絶対勝つ

てやる……！」

「フッ、光らしいな……」

行くぞ！ソウルユニゾン

ロックマン・ブルースソウル……！！

こんどは全身赤色を基調とした姿に変化した、左手にはソードが
装備されている

「やつには飛び道具は効かないらしい・・・」(炎山)

「それなら直に行くまでだ!!」(熱斗)

バトルチップ!!ファイターソード!!

「行くぞ、フォルテ!!!」

『…………キサマらの相手などムダだ…………』（フォルテ）

シュンッ…………

フォルテはサテライト・レオの方向へ消えていった…………

「追いかけるぞ！」（熱斗）


~~~~~そのころ・コダマタウン・公園~~~~~

・ 「旅行は中止になったし、いきなりミソラちゃんはいなくなるし・

） 星河くんは公園に呼び寄せておいて、いつくるのよっ！……」  
ルナ）

「まあまあ委員長、落ち着いてください・・・」(キザマロ)

「どうしてスバルくんはここに呼び寄せたのかな」(マナブ)

「さあな。しかし、世界はいま何が起きているんだ」(マモロウ)

・・・シュッ

「ロックマンさま・・・じゃなくて星河くん！」

「いったい何のようなの！説明して！！！」（ルナ）



## 決戦！フォルテvsレオ・キングダム 後編（後書き）

フォルテのゲットアビリティプログラムの機能は2つあります

1つは対戦した相手の攻撃などをくらうことで相手のチカラを手に入れる

2つめは相手を自分に取り込み体内でデータを同化させることで、相手のチカラを手に入れる（エグゼ3のプロト戦前にフォルテが緑の球状プログラムを取り入れた方法）

一応、書いておきました

たぶんこんな感じだったと思いますが・・・

あと、ここ数話かフォルテ編がだらだらしていますが、まだ続きますので我慢して読んでください、お願いします

信じる!!!

「みんなに伝えておかないといけないことがあって・・・」

「なんなんだ、スバル？」（ゴン太）

「というか、カンベシティで何が起こっていたの

知ってるんでしょ、説明して！」（ルナ）

「・・・うん、わかったよ」

じつは・・・」

スバルは復活したフォルテのこと、吸収された大吾たちのこと

光熱斗達、そしてキズナ・フォースシステムのことを話した

「なるほど、ブラザーの絆を信じる・・・か」(マモロウ)

「わたしたち、星河くんあまり信用されなかったみたいね」  
(ルナ)

「えっ・・・」(スバル)



「わたしたちは星河くんになんかと言われなくても

あなたとの絆を信じないなんてこと、絶対にしないわよ」(ルナ)

「そのとおりですよ、スバルくん。ぼくらはブラザーなんですから」(キザマロ)

「きみをフリーズなんか、絶対にさせないぜ」(マモロウ)

「マグネッツのチカラ、使ってくれないか」(マナブ)

「フォルテなんか、さっさとやっつけてくれよな!」(ゴン太)

「……ありがとう、みんな」(スバル)

『だから、あのまま宇宙に行っとけばよかったんだよ』(ウォー  
ロック)

「でもちゃんと言っておかないと……」

あれ、ツカサくんは……見当たらないけど……」  
（スバル）

「おまえ、あいつともブラザー結んできたのか？」（ゴン太）

「う、うん……」（スバル）

「まあ、ツカサくんには、私直々に連絡しておくから行ってきなさい」(ルナ)

「ありがとう、委員長」(スバル)

「フォルテを倒したら、また旅行行きましょう」(キザマロ)

「うん……じゃあ行ってきます」(スバル)

シュンツ――

~~~~~サテライト・ドラゴン~~~~~

ヒヤッカリヨウラン！

ゴオオオーーーーー……

『……ムダだ……』（フォルテ）

ドラゴン・スカイの吐いた息吹もフォルテの前では無意味……

『……キサマを取り入れ……人間に復讐を……』（

フォルテ)

ブーーーーーン・・・・・・・・・・アースブレイカー!!!!!!

バーーーーーン・・・・・・・・

ドラゴン・スカイはサテライトごと吹き飛ばされ、

そしてドラゴンはダメージを喰らい、瀕死の状態に陥った

『ゲットアビリティプログラム!!』

・
フォルテの右手のひらが、ドラゴン・スカイを飲み込んでいく・

「フォルテ!!!!」(熱斗)

しかし、熱斗が着いたときにはすでにドラゴン・スカイはフォル
テの中に・・・

『・・・なんのようだ・・・』 (フォルテ)

「お前を倒しにきた!!!」 (熱斗)

『倒しにきた．．．．．おもしろい．．．．．』

．．．．．試してやる．．．このチカラを．．．．．『（フォル
テ）

．．．．．バトルチップ、ワイドソード!!

．．．．．ダークアームブレード．．．．

信じる!!!（後書き）

朝の4時半ごろ、操作を間違えて未完成のまま出してしまいました。
すみません。

スバル合流！

．．．．カンッ．．．．キンッ．．．．

フォルテと熱斗（炎山とソウルユニゾン・ブルースソウル）は
剣を交えていた

『．．．．．フィン．．．．．ちょこまかと．．．．．』（フォルテ）

・・・パリン

「やばいな・・・完璧に押されてるぞ・・・」(炎山)

熱斗のワイドソードは折られてしまった

「じゃあ、これならどうだ!」(熱斗)

バトルチップ ソード ワイドソード ロングソード スロット・
イン!

プログラムアドバンス ドリームソード!!

熱斗の左腕が巨大なソードの変わっていく・・・

「おりゃあ~~~~~」
(熱斗)

スッ・・・

「フォルテが消えた!？」
（熱斗）

「……………うしろだ!」
（炎山）

「……………遅い……………」
（フォルテ）

グサッ・
・
・
・

フォルテのソードが熱斗の胸に突き刺さり、貫通した・
・
・

「遅いのはそつちだ!!！」
（熱斗）

カワリミ!!!

手裏剣がフォルテに向かっていく……が避けられる

『
・
・
・
・
・
』 (フォルテ)

「
うわゝ、
効いてね」 (熱斗)

シュンッ・・・

「すみません、遅れました！」（スバル）

「いいぜ、で、どうだった？」（熱斗）

「レオ・キングダムの言ったとおり……でした」

「よし、じゃあ戦つか！」

「はい！」

バトルカード ヘビーキャノン！

バトルチップ キャノン×3 プログラムアドバンス ギガキャ
ノン！！

『……………うっとうしい……………』（フォルテ）

ブーーン……エクスプロージョン

無数の光が、熱斗たちの攻撃を突き進んでいく・

くっ……バリア！

「攻撃が……効かない……」（スバル）

「もう、こういう攻撃に飽きたみたいだな」（炎山）

「よしっ、ソウルユニゾン解除！」（熱斗）

ブーーン・・・

『スバル！クロスカード使っぞ』（ウォーロック）

「わかった」

「ロック、秘密兵器の出番だ！」（熱斗）

『へっ?』（ロックマン）

「だから、前に渡したやつ！」（熱斗）

『……でも、あれを使ったら……』（ロックマン）

クロスカード！プレデーション！！！！！！

~~~~フォルテ・体の中~~~~

・・・パルス・ソング!!

ミソラは音波をつかってひたすら暗闇の中、避難できていない人を探していた

『もうこれだけ探したらいいんじゃない？』（ハープ）

「だめよ、ハープ。まだ、いるかもしれないんだよ！」（ミソラ）

『……………ハーイ……………』（ハープ）

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

『ミソラ!!--!』  
(ハーブ)

「わあっ!--!ビックリしたあゝ。今度はなに?」



『ハンターV Gから出てる・・・この光っている糸はなに？』

「ほんとだ・・・なんだろ・・・」

ミソラのハンターV Gからは、確かに糸状の光が伸びていた

まるで、だれかとつながっているように・・・

一筋の光・・・（前書き）

投稿の間があいて、すみませんでした

一筋の光・・・

~~~~~公園~~~~~

ミソラと同様、ルナ達のハンターV Gからも光が出ていた・・・

「ついに始まったわね」（ルナ）

「・・・スバル君、頼んだよ」（マモロウ）

~~~~~宇宙空間~~~~~

「なんだろ、この感覚は・・・」  
（スバル）

『ああ、見た目は変わらねえが・・・力が無限に沸いてきやがる』  
（ウォーロック）

プシュウウー……

「よかった」(熱斗)

『よかったじゃないよ、熱斗くん！』

サイトバッチを使ったら、熱斗くんの体に……『(ロツクマン)』

「まあまあ、もう俺たち死んでも同然なんだし……」

それに、フォルテを倒すにはこれくらい覚悟しないとな！」(

熱斗  
)

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「行くぞ！スバル！」  
(熱斗)

「はい！」  
(スバル)

バトルカード ブレイクサーベル！

バトルチップ ネオバリアブルソード！

「……フン……少しはやるようだな……」  
（フォル  
テ）

……ダークアームブレード……





『スバル！こうなりゃ、あれ、使っぞ！』（ウォーロック）

「わかった！」（スバル）

・・・うおおおおおおおっ！！！！！！

ピキーーーーン・・・・・・・・・・

「これは……」(スバル)

『音波のチカラ……ハープか!』(ウォーロック)

「ハープ・ノート!？」(スバル)

スバルの体はピンク色に包まれ、手にはギターを持っている・

~~~~フォルテの体の中~~~~

「・・・・ついた~~~~！」（ミソラ）

ミソラはなんとか、暗闇の中から避難所に戻ってきた・・・

「ミソラちゃん、お疲れさま」（あかね）

「お母さん！無事だったんですね、よかったあ！」（ミソラ）

ミソラはあかねの姿を見て、安心していた……そのとき――！！

ピーーーーーーーーン！！！

「え、これ、なに、何の音！？」（ミンラ）

620

『ハンターV Gよ！さっきの光が反応してるわ！！！』（ハープ）

「えっ、ちょ、ちょっと、うわあああっ！！！」（ミンラ）

「ミソラちゃ〜ん!!」
(あかね)

・・・あかねの呼び声もむなく、ミソラはどこかへいつ
てしまった

~~~~~宇宙空間~~~~~

『グッ………グワッ………』  
(フォルテ)

「!?!?様子がおかしい!」  
(熱斗)

『ぐわあ————っ!!!!!!』 (フォルテ)

フォルテの中から一筋の光が飛び出てきた・・・

パシュン・・・



「き、きみは……」

……ハープ・ノート……いや、ミソラちゃん  
「……」  
(スバル)

・  
・  
・  
・  
・  
・

現れたのは、間違いなく電波変換中のミソラであった。  
・  
・  
・  
・

もう一つのプログラム

「ミソラちゃん！」（スバル）

「・・・・・・・・えっ!？」

「記憶が戻ったんだよ！」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・?ミソラちゃん?..?」

・・・うわああ~~~~ん

「えっ?????」（スバル）

『ふふふっ、オシナの口を泣かしちゃダメよ』（ハーブ）

「へ?????」

『そうね、やっぱりスバルくんには難しいわね』  
（ハープ）

「……………」

『……………もうそろそろ、感動の再会シーンは終わりのようだぜ』  
（ウォーロック）

「はい！」

「スバル！！」  
（熱斗）

「これから、オレは最後のチカラをフォルテにぶつける！」

「・・・どっぴんことですか？」

「炎山とソウルユニゾンして、やつをオレの体内に吸収する

そして、あるプログラムを使ってやつを跡形もなく消し去る！」

すると、ミンラが・・・

「消し去ってしまったら・・・中の人達は・・・」

「大丈夫。このプログラムはフォルテにしか反応しない」

「・・・本当ですか」（スバル）



「ああ、本当だ。」

だから、オレがフォルテに接近するときの援護を頼む！」

「……はい！」

『くっ………』（フォルテ）

フォルテはまだ苦しみの中にいた……

「いまだ、光！」（炎山）

「ああ…………ソウルユニゾン…………！」

再び、ロックマンはブルースソウルと化した

「行くぜ…………！」



もう一つのプログラム（後書き）

このつづきは続けていります

## 科学省

~~~~~200年前・科学省~~~~~

ピッ、ピッ………ピキーーン………

「できた!?!」

「光……それでフォルテを倒せるんだな」(炎山)

「ああ。でもこのFプログラムは、1体のナビでは負荷が大きすぎて……」

「なら、俺とライカを混ぜろ」

「……はじめっから、そのつもりだったけどな！」

「フン、そうか……」

「いますぐ使えるのか？」（ライカ）

「いや、今のインターネット上で使えば、フォルテどころか

世界中のインターネット、コンピュータを消してしまう・・・

そんなことがもし起これば、フォルテの推定被害以上のダメージだからな

・・・せめて、宇宙みたいな広い場所で使えば・・・」

「・・・いまの技術では宇宙までネットワークを広げられないかな・・・」(ライカ)

「光・・・以前おまえがSというナビからもらった、

ギガフリーズは使えないか・・・

俺たちのナビにまずFプログラムを分けてインストールする。

そして、フォルテの前で俺たちごとフリーズさせる。

それならフォルテの暴走は抑えられるし、万が一フリーズが解けても

やつにFプログラムを使って消し去る・・・」(炎山)

「それだ、炎山!!」

「・・・将来、今よりかはネットワーク技術が発達していそうだ

からな」

「よし、じゃあその計画を実行しよう！」

 $\S\S$

~~~~~

（ライカがいなくなってFプログラムは不完全だが、倒せるのか）  
（炎山）

（さあ、やってみないとわからないぜ！

これしか方法がないんだ。行くしかないさ！）（熱斗）

( やってみないとわからない・・・か )

( よっしゃあ~~~~、待ってるフォルテ!!!( )

うおおおお~~~~~

## 復活と死（前書き）

これからはワードで作ってから「貼り付け」機能を使って書いていくので、だいぶ文章が長くなりました。読みづらかったらごめんなさい。

## 復活と死

『……うつとうしい……』

……アースブレイ……

バトルカード グラビティステージ！

『……クツ』

フォルテの足元には黒い渦、そして動きを止めてしまう

「ありがとよ、スバル！」

おりゃあ~~~~

ドーーーーー……

フォルテと熱斗・炎山は衝突し、一時的にフォルテを吸収

そして……

「Fプログラム、起動！」

ブーーーーーン

パシューーーーーーン……パツ！……

「………父さん……」（スバル）

「スバル……よくやった」（大吾）

「ヨイリー博士やみんなは……」

「フォルテから出られた衝撃に乗って、アマケンに向かっている

でも、いったいなぜ出られたのか……」

『……あの光熱斗とかいうやつのおかげだろ』（ウォーロック）



「光熱斗．．．．．200年前の科学者か!？」

「うん、フォルテを封印するために自分ごとフリーズして．．．」

「．．．これは大変なことをしてしまった．．」

「．．．えっ!？」

「スバル．．．いまから俺はアマケンに向かう．．」

「．．．たぶん、光博士がフォルテの封印に使った

プログラムの残骸があるはずだ。」

「．．．」

「それを修復し、もう一度やつに使う」

「でも、どうやって．．．」

「それは．．．．．まだ考え中だ．．．」

それも含め、今は時間が欲しい．．

アマケンで作業をしている間、フォルテを止められるか？」

「うん、やってみる」

『フォルテなんか、俺たちで十分だぜ！』（ウォーロック）

「わたしも戦いますんで、任せてください！」（ミソラ）

『ミソラを死なせるなんてこと、させないわよ』（ハープ）

「よし、じゃあ待っていてくれ。すぐ作ってくるからな！」

パシユン．．．．．

大吾は地球へ戻っていった．．

ぐおおおおおおおっ

熱斗と炎山は、まだフォルテを消しきれずにいた

「くそ・・・プログラムが・・・効かない」(炎山)

「だ、大丈夫・・・」(熱斗)

キーン・・・キーン・・・キーン・・・バーーーーーー

辺り一面を爆風が包む

「きゃっ・・・なにこの爆風」(ミソラ)

シューーーーーー

「……………収まった……………あっ！」（スバル）

スバルが見たものとは……………

『……………ぬるいな……………』（フォルテ）

フォルテの右腕には熱斗、ソウルユニゾンが解けている  
炎山はもう消されてしまったようだ……………

……………バンッ

フォルテは熱斗を投げ出し

ブーーーーン……………アースブレイカー

フォルテの放った攻撃は、熱斗に直撃

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

『・・・反応がなくなっちゃった』（ウォーロック）

「・・・そんな・・・熱斗さんが・・・」（スバル）

撃破!!!

「熱斗さんが……やられた……」

『集中しろ、スバル!こうなりや戦うまでだ!』

「……わかった、ウォーロック……行くよ!」

『そっぴやいまの状態は、ハープクロス……』

スバルはまだ、クロスカードの効力を維持していた

『……つまらん……』

フォルテは地球のほうに向かって

……ブーーーーン……

『おい、スバル!やつが地球を破壊するつもりだ、早くしろ!』

「スバルくん、さき行くよ！」

「待って、ミソラちゃん！」

「？」

「いま、ブラザーの能力を借りて戦えるクロスカードっていうものを使ってるんだ・・・」

そして今、ハープ・ノートのチカラを借りている・・・」

「・・・・・・・・」

「このチカラは、ブラザーが信じれば信じてくれるほど増大するんだ」

だから、改めて言うのもなんだけど・・・・・・・・・・「ごめん」

「・・・・・・・・・・んっ？」

ミソラは首をかしげた

「…………えっ？」

「なんで謝るのかなー、って」

「それは……………記憶なくしている間にいろいろひどいこと  
言ってたから

……………気にしてるのかなと思って……………」

「ぜんぜん気にしてないよ」

「……………」

『スバル！急げ、もうやつがエネルギーをチャージしちまう！』

「わかった。ミソラちゃんも、行くよ！」

「うん」

シューーーーーン…………



二人はフォルテより地球側に回り込み・・・

二人とも、背に持っているギターを両手に出した

「よし」

「行くよ!」

『…………ジャマだ…………』

……アースブレイカー

…………シヨックノ…………って

「なにこれ!」(ミソラ)

パーーーーッ・・・

二人の持っているギターが合体し、一つの巨大なギターが現れた

「・・・これなら・・・」(ミソラ)

「これなら・・・?」

「これなら、フォルテの攻撃なんか楽勝ね!」

「・・・よし」

「スバルくんはこの弦を押さえててね」

・・・いくよ・・・

ビッグノート フォルティッシモ!

すると、巨大な音符が二人の両側に現れた巨大な装置から発射されて

フォルテの衝撃波を切り裂いていく……

『……クッ……なぜ……なぜ負ける……』

音符がついにフォルテをとらえ

クッ……グワアアッ

[illegible]

「やった、フォルテを倒した」

「これで終わったね！」

厄介な相手だったぜ

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

.....

## 白と黒の再来

「このことを父さんに連絡しないと・・・」

フォルテを撃破したスバルは、クロスシステムを解き  
一方のミソラも、スバルが連絡をし終えるまで待っていた

・・・プルップルッ・・・

「父さん？」

「スバルか、もうすぐで復元し終わるから待っててな」

「・・・フォルテなら、もう倒せたよ」

「本当か！？よくやったな、スバル！」

・・・まだ終わってないよ

「だ、だれ！？」

ミソラが見た先には・・・

『・・・久しぶりだね、ロックマン・・・いや、スバルくん』

「・・・！？」

・・・プツン・・・ツーツー・・・

「・・・ジェミニ・スパーク・・・なんで！？」

『はははっ、教えてやろうか』（ジエミニBRACK）

『君の知ってる、ヨイリー博士に復活させてもらったのさ』（ジエミニWHITE）

「ヨイリー博士に！？」（スバル）

『ツカサの体内の残留電波を復活させてもらったのさ』（ジエB）

「で、でも、残留電波には、記憶なんて残ってないはずじゃ・・・」（ミソラ）

『ぼくらみたいな上級の電波生命体は、オックスのような下級な電波生命体とは違い

記憶どころか全て残すことができるんだよ』（ジエW）



『じゃあ聞くが、なぜここにいる』（ウォーロック）

『決まってるだろ……………フォルテを復活させて地球を滅ぼし、

F M 星      ケフェウスを倒す』（ジェB）

『ぼくらの能力を使えば、フォルテなんかすぐに再構築できるかな』（ジェW）

「……………そんなこと、絶対にさせない！」（スバル）

クロスカード    プレデーション！

・・・カッ・・・

『ハハハッ』(ジエB)

『フフフッ』(ジエW)

『・・・何がおかしい!』(ウォーロック)

「・・・うっっ・・・」

バタッ・・・

スバルは伏せこんでしまった

「スバルくん、だいじょうぶ!?!」

『無駄だよ、ハープ・ノート』（ジェW）

『もうすぐ、そいつはフリーズしちまうのさ!』（ジェB）

「どっぴつとよ!」

『・・・スバル!早くクロスシステムを解除しろ!!!!』

「くっ・・・ダメだ・・・」

『じゃあ、ツカサとのブラザーを切れ!』

「それは・・・いけないんだ・・・」

『なにいつてやがんだ。さっさとしろ!』

『ミソラ、ジェミニを倒せば何とか・・・』

「そうね、ハープ!」

ショックノート!

『ハープのやつめ!』 (ジェB)

『ははっ、どうやらウォーロックと同じ運命を辿りたいらしい』  
(ジェW)

・・・ジェミニ・サンダー!!

二人の右腕、左腕から放電され、ショック・ノートの音波を壊し

そのまま一直線にミソラへ向かっていく

Y O、Y O、Y Oオオオオオ~~~~~!!!!

「キヤーッ」(ミソラ)

カンッ……

「えっ……」

ミソラの前には、見覚えのある影が……

「ヒーローは後から現れる!」

「………曉さん!？」

『シドウ……星河スバルの様子がおかしい………』(アシッ  
ド)

「ああ、そうみたいだな」

「あのジェミニ・スパークさえ倒せれば・・・」(ミノラ)

『ははっ、ぼくたちを倒すって?』(ジェW)

『笑わせるな、お前らなんかに・・・グワッ・・・』  
(ジェB)

「・・・調子に・・・乗るな・・・」

・・・ブライソード・・・

ジェミニ・スパークBの胸を貫通したブライソードが、体を引き  
裂く

・・・ザシュッ・・・

『グワァーーーーーッ!!!!』

「曉さん、なんでブライがここに？」（ミソラ）

「ははっ、俺もわからない」

『くっ、やられたか・・・』（ジェウ）

『・・・次はお前だ・・・』

『せめてロックマンでも再起不能にしておくか』

パシュン・・・



「逃げやがった……か」

「……くっ……ぐわっ……」

『ス……バル……早くしろ……』

「スバルくん、もう少しの辛抱だ。」（暁）

シューーーーーン

ジェミニ・スパークWは地球から遠ざかっていた

ブライに追いつかれないように・・・

『くっ、あの黒いやつの強さは何だ！

あんな電波体、見たことないぞ！！！！』（ジェW）

・・・・・・・・待ちなYO！！！！

『ダレだ！』

『YOYO！！お前はジェミニ・スパークで間違いないかYO！』

『…………ふざけた奴だ』

…………エレキソード！

『YO！オレはムーン・ディザスター。』

友人のロックマンを助けるため、君をデリートするYO！』

…………ムーンスピン！

ムーン・ディザスターはスピンし、三日月状の物体を発射してくる

『なんだ、このふざけた技は……………うわあ……………』

三日月状の物体がジェミニに命中した

『くっ、頭がフラフラして、感覚が……』

『それは、当たると相手を混乱させるんだYO！

残念ながら、これでおわりだYOYOYO~~~~オ！』

……ムーンバズーカ！！！

ムーンディザスターの手には、月の形をした球が現れ、

YOオオオオオオオー~~~~ッ！！！！！！

発射されて、身動きの取れないジェミニに向かっていく

『くっ……くそ……くそお——!!——!!』

バ————ン……………

……………シューーン

『これは……人間かYO』

電磁バリアをまとして、緑色の髪をした少年が気絶して宙に浮いていた……

『地球の奴か、コスモウェーブまで行くかYO!』

パシュン・・・

そして、ムーン・ディザスターは地球に向かっていった・・・

第一部終了！

2週間ほど空けてしまつてすみませんでした

理由としては、このあとのストーリーを考えていました

考えがまとまってきたのでまた書いていこうとおもいましたが、

自分の中で「第一話」の入りが悪くて納得できなかったので、

もう一度ゼロから（流星のロックマンnextの続きですが）始めさせていただきます

勝手なことをしましてすみませんが、これからは「流星のロックマンnext stage」?

「DDDの暗躍」(タイトルを変更しました)のほうをよろしく  
お願いします。

今まで読んでいただき、ありがとうございました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7862/>

---

流星のロックマンnext stage? ~FM星の危機・過去の遺産~

2010年10月19日09時17分発行